

Monto Kaj Neĝo
Monata Organo de Monta kaj Neĝa Clubo.

山 と 雪

第 參 號



札幌 山 と 雪 の 會 發行

第三號目次



瑞西山岳會の登山小屋(承前)

スキー滑走法に就いて

距離競技用締具の二三に就いて

雪崩(上)

全日本スキー聯盟代表委員會に出席して

雜誌錄

▲舊いHuetten-Buchより

▲寄贈並新著圖書雜誌

寫眞

▲Nordparamushiri, westküste

▲Blich auf die Chikuragruppe von O

▲前十勝より富良野岳を望む

▲五色温泉に於けるウインクラー氏

圖版

Spannort Huette

Dom Huette

unterhalb der Schlossbergnecke ob engelberg. uri.

Sektion Uto, S. A. C. auf der festi ob Randa, Wallis Sektion Uto, S. A. C.

グスタフ・クルツク著

山崎春雄譯

栗谷川平五郎

高橋昂

アンドレ・アリックス著

久野保雄譯

佐々野保雄補

高橋昂

〔一〕

〔三〕

〔七〕

〔三〕

〔三〕

〔四〕

アーノルド・グブラー

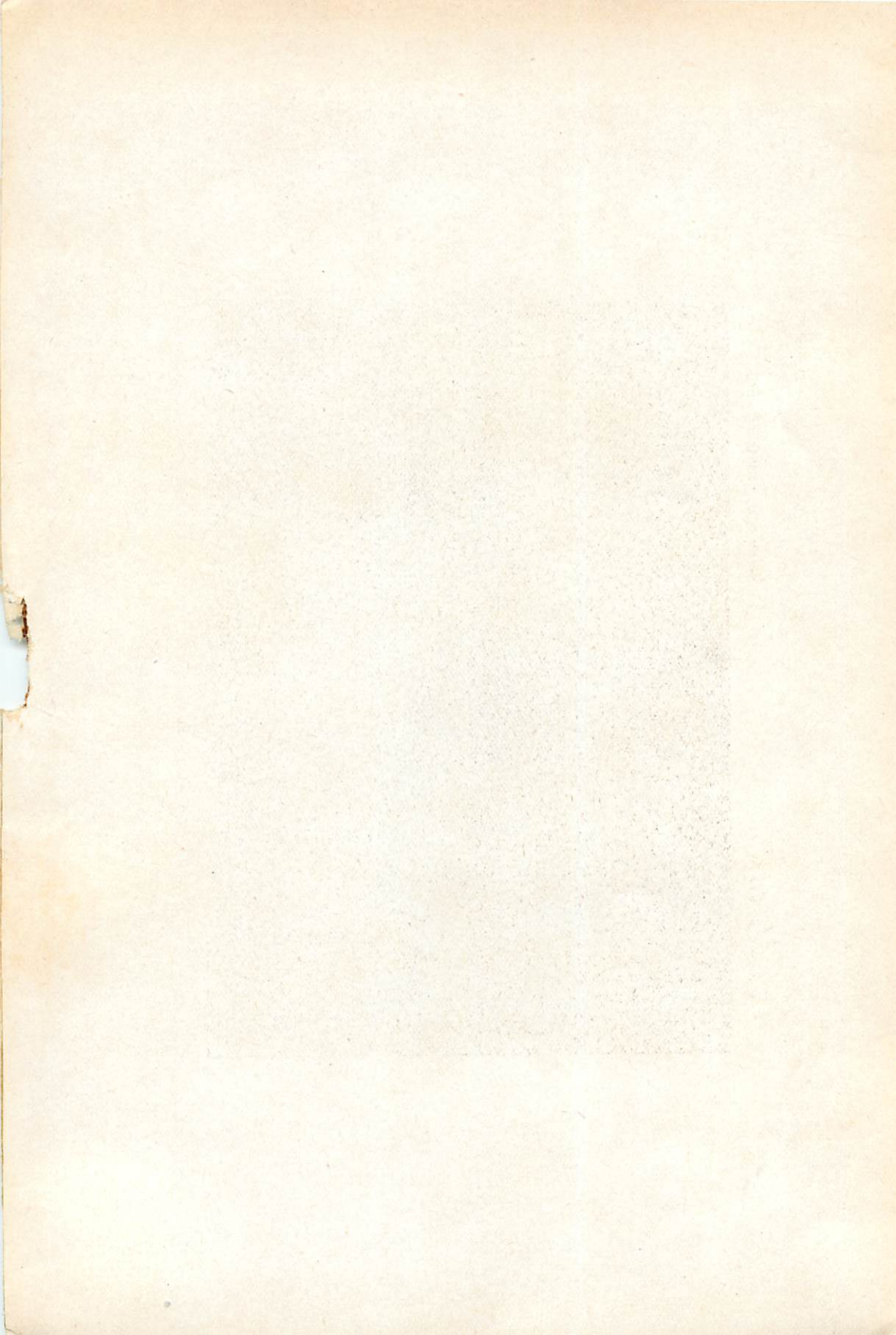
アーノルド・グブラー

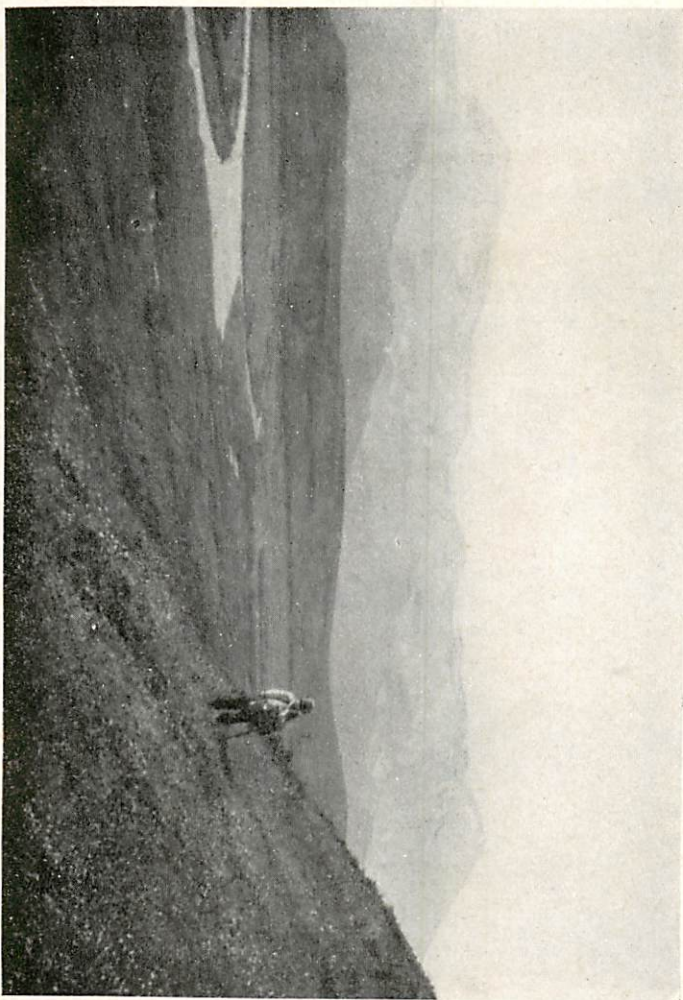
大谷雄三郎



Nordparamushiri, westküste

ア - ノ ル フ ・ グ ラ ラ -





Blick auf die Chikura-Gruppe von O

ア - ノ ル フ ・ シ ラ -



前十勝より富良野岳を望む

大谷雄三郎



五色温泉に於けるラインクラー氏

瑞西山岳會の登山小屋

(承前)

グスターフ・クルツク著
山崎春雄譯

B. 登山小屋解説

ウト支部の建設したる初期の登山小屋、スバンオルト、ドーム、フオルアルプ及びフエライナヒユツテの四に關する工
事施行の狀況は關係書類が僅かしか保存されて居らぬ爲に今日之を詳かにすることは困難であるが予はワルデル教授及び
マツクス、ゲイエル氏の談話により貴重なる材料を得ることが出來た。教授は久しくウト支部長の任に當つて功勞あり、
ゲイエル氏はスバンオルトヒユツテ改築の擔當者、フエライナヒユツテの建築者及びモデルセルヒユツテ設計の立案者と
して又支部の小屋監督としての長年の勤勞に對して共に支部が感謝の責を負ふべき人々である。是等初期の小屋に就ては
見積書及び契約書は保存されてあるが決算及び小屋の記録が全く欠けて居る。予は従つて小屋の建設費用を支部の毎年の
收支決算報告より算出したのであるがこれでは工事施行の方法や其進行に就いては充分なる會得は出來ないのである。之
に反して予の自ら關係したる新しき四登山小屋の建設に關しては予は其落成の度毎にウト支部及び中央委員會の爲に詳細
なる決算書及び工事報告を作製した。

予はこれより一々の小屋に就いて其建設の歴史、位置、到達路、附近の登攀、敷地、設計及び構造、工事の實施及び建

築費に關しあらゆる重要な事項を總括して記述する積りである。

茲に注意すべきは建築費の今昔の比較に當つて一八八〇年より一九二〇年に至る迄の間に如何に甚だしき貨幣價值の下落が生じたかといふことである。既にスパンオルト、ドーム、フォルアルプ及びフェライナヒユツテが建てられた一八八〇年乃至一八九五年の間に於て建築費は三割の騰貴を見て居る。

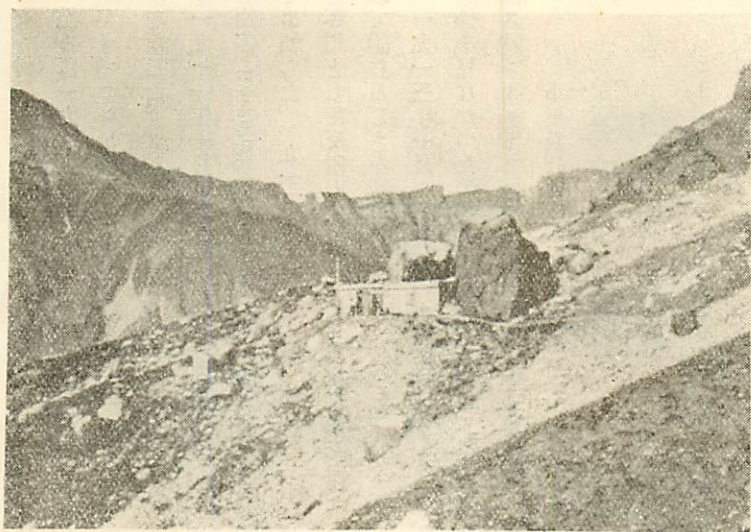
次で一九一〇年に於けるメデルセルヒユツテの建築費は一八九五年の夫れに比すれば更に其の十三割に相當するのである。次で一九一〇年乃至一九一六年の間に建築費は更に一割五分の騰貴を來した。カドリモヒユツテの建築は幸に其地方に於ける事業不振の時機に遭遇したる爲其點に於ては好都合であつた。一九一八年乃至一九二〇年に於けるアルベルトハイムヒユツテの建築、ドームヒユツテの擴張及びフォルムアルプヒユツテの新築に當つては時恰も其以前より始まれる物價の騰貴が未だ繼續したることゝて建築費も従つて一九一六年當時に比すれば更に約二十五割の暴騰を見たのである。故に是等の小屋の建築費はこれをカドリモヒユツテの夫れと比較せんとする場合には實際支拂ひたる金額の約四割の價值に迄引下げて考へなければならぬ事となるのである。アルベルトハイムヒユツテを若し一九一六年に建てることが出来たとしたならば二万八千フランの代りに僅かに一万一千フランを以て足り、ドームヒユツテの改築は僅かに四千フランを以て、フォルアルプヒユツテの新築は僅かに九千フランを以て足りたであらう。

各々の小屋は重なる平面、立面及び斷面圖(百分の一縮尺)により解説することゝなした。ウト支部所屬のものゝ外に予は尙ゴットハルド支部のクレインテンヒユツテを採録した。此のヒユツテは予の設計により予の監督の下に建てられたものである。尙同じく予の一九二二年の設計に係る未だ實現せざる小屋計畫、及び一兩年中に建設さるゝ筈なるウト支部の新しいスキーハウスの計畫をも併せて記述することゝなした。

一、スパンオルトヒユツテ

Spannort-Hütte

am Nordwest-Pass des Schlossberges, Kanton Uri.



位置、到達路及び登頂

スバンオルトヒユツテはシユロスベルグリユツケの下、ガイスリユツケンと稱する斜面にある大岩石に倚つて建てられて居る。海拔一九八一米。チューリヒよりの路はルツエルン、エンゲルベルグを經、更にヘルレンリユチイ迄は車道、ステツフエリ迄は馬を通じそれより良き歩道が小屋まで通じてゐる。エンゲルベルグより小屋迄約四時間。或はゴットハルド線よりすればエルストフエルド及びアツチングハウゼンよりズレーネンバスを越え約八時間にて達することが出来る。小屋を出發點とする登頂にはシユロスベルグ、大小スバンオルト、ツウエヒテン、シユネーヒユーネルスツク及びクレレンテ等がある。スバンオルト及びクレレンテの登攀は屢々クレレンテンヒユツテ或はエルストフエルドへの峠越えと結合される。或は是等の登頂と併せてゴットハルド線方面即ちロイス谿谷に注ぐゴルネレン又はマイエンタール等の横谷に下ることが出来る。

小屋敷地

ウト支部はスバンオルトヒユツテ建設に際し豫めアツチングハ

ウゼン村の承諾を得、次で一八八〇年五月九日附を以て次の如き正式の認可を受けた（認可書正文省略）。

然るに一九〇九年十二月三十日（註、原著は正確なる記録としてすべて日附を明記しあるも以下之を略す）ウリ州の政廳は在來のスパンオルトヒユツテの小屋番ツールフリウなるものにヒユツテ附近の土地三十平方米を六十フランの價格を以て拂下けをなした。ツールフリウは此の土地に即ちヒユツテの直隣りに自ら宿泊所を經營せんと企てたのである。幸に支部は翌々一九一一年一月に至り此土地の權利を七十フランを以て所有者より譲受けることが出来た。同年七月支部の代表者はウリ州の *Korporationsrat* に對し小屋の敷地及び周圍の土地の拂下、ステフエリより小屋迄の通路權及び飲料水利權の設定を出願した。一九二二年十月に至り支部に對し小屋附近の土地三百三十平方米（ツールフリウより譲受けたる土地を含む）を專用として交附し之に三十箇年の借地權を附すること、尙ステフエリより小屋までの通路權を同じく三十箇年の期限を以て認むることを認可せられた。

一九一三年一月ウト支部の小屋監督はアツチングハウゼン村に向ひ權利の登記を要求した。此の件は數年の間拂々しき進捗を見なかつたのであるが漸く一九一七年に至り解決を告げ支部とウリの代表者との間に締結されたる契約により支部はスパンオルトヒユツテの所有者として登記せられ左の諸權利が設定さるゝに至つた。

a. 小屋及び便所を含む三百三十平方米の土地の使用權。

b. 最近の水源よりの水利權。

設 計 と 構 造

スパンオルトヒユツテは石造、一階建、木板セメントの平たい陸屋根を有する小屋である。一八八〇年に始めて建てられたる部分は外徑にて間口五・一五米、奥行五・三〇米の大きさを有し山側に在る巨大なる岩石から覆ひかぶさる位に接近して建てられてあつた。一九〇〇—一九〇一年に更に小屋は北側に向つて六・三五米の長さだけ續ぎ足された。現在の小屋の入口は此の新しい部分の西向きの正面中央にあつて外開きの扉、玄關（Vorraum）及び防風扉（Windangline）から成つ

てゐる。入口よりは居間(Wohnraum)に通じ、其所には各々七人分の坐席を繞らす卓子二脚が奥の壁に接して据えられてある。入口より右側の窓下は厚き壁の凹所として炊事場に用ゐられる。其所に接する隅は炊事ストーブの置場である。炊事場と入口との間には浅い戸棚がある、入口より左の隅は小屋番の専用寢床である。其所と相對して婦人専用(Damenabteil)の三人分の寢床が設けられ居間との間は隔壁を以て仕切られて居る。小屋番及び婦人室を含む此の部分は最初の設計では戸締りの出来る五人分の婦人専用室として作られたのであるが其所の占領に就て或る種の苦情が起つて遂に一九二〇年以來扉を取除き單にカーテンにて仕切るだけのものに改造されたのである。舊ヒュツテの部分は一九〇〇年以來は寢室専用として設備され下部の寢床(Litzebett) (註、ブリツツエは單なる板張りの床にてベットに非ず。S. A. C. の小屋にはベットは例外のLitzebettである。ブリツツエの上には牧草又は藁をそのまゝ敷く) は腰掛けの高さとして十二人分、上部の寢床は室の四隅だけに壁より釣られ、四人分が設けられてある。小屋の西北稍低所には便所が建てられた。

又小屋の南に近く湧泉があつて清冽なる飲料水が得られる。平面圖に現はされてゐるテレースと石積み卓子とは一九二二年に作られる豫定である。

小屋の外壁は五十五センチ及び六十センチの厚さを有し、石灰モルタルを以て固め内外面は上塗りを施してある。一八九九年の改築に當り舊小屋の壁を露出し増築の部分と共に其後側及び兩側面にセメントの上塗りを施工した。炊事ストーブの周圍もセメント床が指定された。小屋の他の全部の床は厚さ三センチの床板を「さねいれ」張りとし根太はコンクリート基礎床の上に架してある。壁の内面は全部除す所なく高さ天井に達する板張りである。小屋は極めて單純であるが勝手よく且氣持のよい感じに作られて居る。

工 事 の 施 行

最初ウト支部はスバンオルトヒュツテの建設に先だちピラツス支部と協力してウリロートストック附近に登山小屋を建設する豫定であつた。後に至つて獨力にて小屋を建設することとなりスバンオルトヒュツテの位置が撰定されたのである。

設計及び工事の監督はヒルガルド教授、請負はエルゲルベルグのカール、ヘス、小屋は既に一八八〇年八月八日に質素なる小屋開きの式を以て開かれた。

茲に掲げたる舊スバンオルトヒユツテの設計圖は一八八〇年三月の日附を有しチユーリヒのヒルガルド教授が四十餘年前に五十分一縮尺により描かれたものである。ウト支部建設の最初の登山小屋設計として興味あるのみならず今日の立場より見るも甚だ巧みなる計畫として推奨すべき價値あるものである。

スバンオルトヒユツテの増築はマックス、グイエルの設計及び工事監督により行はれ、舊小屋の入口は窓に改められたヒユツテの獻堂式は一九〇一年六月二十九日に行はれた。

建築費	一、六〇〇フラン
舊小屋建築費	四四五
設備費	二、〇四五
合計	四、〇四七
建築費(一九〇一年)	五九二
建築費	一九〇
設備費	四、八二九
合計	二六六
便所(一九〇四)	三、八二八
其後の修繕、設備其他	一〇、九六九フラン
總計	

二、ドームヒユツテ

Dom-Hütte

位置、到達路、登頂

ドームヒユツテは海拔二九三六米、ニコライ谿谷の登山中心なる小村ランダの東に聳ゆるフェスチ岩峰の上、標高三二六五米地點の南西、フェスチ氷河の堆石より百米北方なる古き堆石の斜面に建てられ入口を正しく南に向けて居る。ヒユツテの眺望の美はアルベン登山小屋中屈指のものである。

東にはドームの雄大なる西斜面が屹立して居る。其の南にはグラーベンホルンよりドームに向つて東に曳く所の山稜の後に險絶なるドームの南尾根、ドームヨホ、並びに僅かに四基米を隔ててツシユホルンの一見到底登攀を許さぬ様に見える其頂が殆ど息づまる位に近く聳立する。南方は脚下にツエルマツトを俯瞰し、其の周圍を繞るリツフェルベルグ、ガンデック及びシユワルツゼーを超えて凄じ様に高くブライトホルン、小マツターホルン、テオデユールバス、フルゲングラート及びマツターホルンの比類無き立派な山形を望むことが出来る。南西はメツテルホルン、チナールロートホルン、シヤリホルン、ワイスホルン、ブルンネツクホルン、其より北方に眼を轉ずればバルホルン、ワーゼンホルン、シユタインターホルン、及びローネ谿谷をへだててムービーチユホルンの類なき美しい圓錐が招くが如くに呼びかけるであらう。チナールロートホルンの岩壁が美事に段階のついたホーリヒト氷河の上に思切つて屹立する壯觀もヒユツテの客を喜ばす所のものである。しかし何と云つてもドームヒユツテの驚異は雄大なるワイスホルンである。其の銀白に輝く尖頂は僅かに眼前八基米を隔て天に沖するのである。山岳中の王侯に比すべき其の雄姿が海拔既に千四百米のランダの谷底より尙三千百米を抜いて聳ゆる巖々たる大觀は殆ど實在と思はれぬ程のものである。岩壁と森林と相交錯する山腹の斜面より聳立する東尾根は下部は複雑な段階を示す岩稜として、上部は眼を眩する氷雪フィエルネの山稜として頂上まで達して居る。此の尾根とブルンネツクホルンの岩壁との間に懸るピース氷河は上はワイスホルン北尾根に迄高まり其の舌端は下つて谷底を距る六百米の高さに迄達して居る。ワイスホルンの耀かしき白頭は尙我等のアルベルトハイムヒユツテ及びカドリモヒユツテの居心

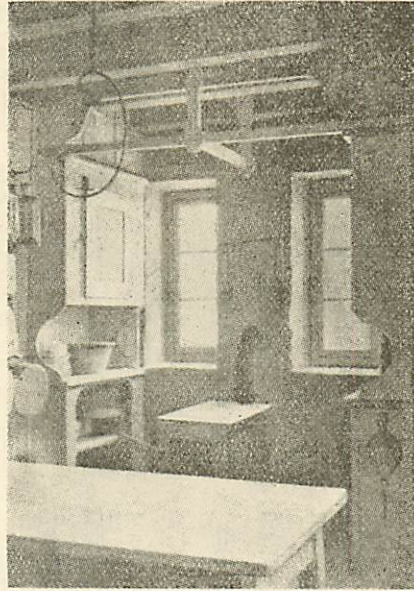
地よき窓よりも眺められて小屋の訪れの喜びとなつて居る。

ドームヒユツテへの到路はランダの大通りを東北に草原の臺地に登りフェスチ岩峰を小徑と輕き岩登りにて堆石斜面に達することが出来る。ランダより四時間前後を要する。

ヒユツテよりの登頂は先づドーム、次でレンツシユピツツエ、ナーデルホルン、シユテツクナーデルホルン、ホーベルグホルン及びデユレンホルンである。一九一五年以來ヒユツテより直接にテツシユホルンの登頂が行はるゝに至つた従つてドームヒユツテはミツシャーベル連峰全部の登頂の用をなすのである。

舊ドームヒユツテの設計と構造

ウト支部がドームに登山小屋を建設するに至つた動機はグレーブリス教授の發意に依るものであつて其の實現も亦同教授の不撓の熱心の賜物である。建設に際しては最初は大きな障碍に遭遇し一八八七年の支部年報に於てはドームヒユツテの計畫はランダ村の反對により實行を斷念せねばならないと發表されてある程であつた。幸にランダの牧師イムボーデン及びツエルマツトのザイラーの盡力により遂にランダ村の反對を除く事を得たのである。



ドームヒユツテの計畫は建築家ロイトリンゲルによりて立案され工事の監督も同じ人の擔當する所であつた。一八八七年四月の日附を有する建築設計書の指定する所によれば小屋は九人の登山者に充分なる場所を與ふることゝなつて居る。

これにより六十センチの幅を有する寢床九人分、従つて五メートル四の小屋の間口（内徑）が決定されたのである。案

内人及び人夫の爲めには屋根裏が充てられ同じく九人乃至十人の席を與ふることゝなつて居る。階下は寢床の外に机一個炊事ストーブ及び臺所戸棚（押入れ）一個を置く。屋根裏への登降には梯子を用ゐる。工事に當つては石壁を積む前に先づ木部の柱を組立て、屋根を完成し、内壁及び屋根の板張りを仕上ぐることに、これによつて従業者は天候の如何に關せず小屋内にて働くことが出來得る爲めである。内壁の板張りとは石壁との間は十五センチの間隔を保つべくこれにより濕氣及び寒氣を充分に防ぐことが出來る様にする。石壁は石灰モルタル積とし壁の内面は上塗りを施し外面は目地を填充するに止む。屋根葺材料としてはロイトリンゲルは葺葺を採用し階下の床はセメント床を指定した。基礎工事は直接岩盤の上若くは周圍地面より一メートルの深さに施行すべきである。

一八九九年秋、ラング村長ダニエル・ブランチエンとの間に締結したる工事契約書に依ればヒユツテは一八九〇年六月末日までに竣工することゝなつて居る。設計の内變更を見たるは屋根葺材を此地方に普通なる石板葺（註、スレートでは無く素朴なる自然の片麻岩の薄き板を用ふるのである）となせること、床も同様石板敷となせることである。工事は次の如き分割請負として行はれた。

一、基礎	工事	六〇フラン
二、石	積	三一〇
三、石	工	一一〇
四、石	板	一九〇
五、屋	根	三〇
六、木	工	三二〇
七、大工及び指物工	手	四五〇
八、石	灰	七〇
九、石	灰	二一〇
一〇、木材、家具等	運搬	一、三〇〇

一一、床用石材及び手間	二一〇
一二、金物及び釘	六〇
一三、右運搬	八〇
合 計	三、四一〇フラン

本契約の追加として更に竣工期限を一八九〇年七月十日に延期し尙請負者に對し工事の仕上り良好なる場合には賞與金として五十フランを與ふることを約束して居る。

工事の實施に關しては記録が残つて居らぬが獻堂式は同年七月二十八日に舉行され、牧師イムボーデンがランダ村の名に於て其の管轄内にヒユツテの建設を見たることを感謝する意味の祝辭を述べて居る。同年のS・A・C年報の簡單なる記事によれば式に列席したるは前記牧師イムボーデン及び助教一人、獨逸山岳會員一人、S・A・C中央委員三人、ダゾオース支部會員一人、ウト支部會員三人及び案内者人夫等、翌日は來會者全部ドームの登頂をなし、小屋は内面全部板張りの石造にて來會者の満足を得た旨が報告せられて居る。

ニコライ谿谷に普通なる薄き片麻岩の石板葺屋根は海拔三千メートルのフェスチの上にては適當なる材料では無かつた。此種の屋根は元來初夏の候融雪の爲に雨洩りを免れざるものであるのかくの如き高山の上に於て風雨の侵蝕を受けて早くも破壊さるゝに至つたのは蓋し當然のことであつた。一九〇三年小屋は亜鉛鍍鐵板葺に改造された。然るに當事者は此際著しく輕量となつた屋根を風の力に對して補強することを考へなかつた爲に一九〇五年一月屋根は暴風の爲に破壊され全然新に改造するの已むを得ざるに立到つた。今度の工事は充分なる注意の下に施行されたる爲め爾來は何等の障害を受くることは無かつた。小屋の構造、其石壁及び十五センチの間隙を保つ内面の板張りは極めて堅牢且つ叮嚀に考案されたものである。實際此小屋は模範的の出來榮であつて山岳會は其建設者ロイトリッングルに對し今日尙感謝すべきである。ドームヒユツテが直ちに他の多くの小屋の手本とならなかつたことは予の了解に苦しむ所である。予に取つては此の小屋が最も目的に叶つた設計の手本となつたのである。フェスチの孤立せる岩角の上に猛烈なる風雨がドームヒユツテを繞つ

て吹荒むこと爾來三十有餘年、小屋は平然として微動もせず之に對抗した。ドームヒユツテの實例に依り吾人は堅固なる石造は風雨の力に對し最も顯著なる耐久力を有するものにして彼の木骨柱建の小屋の如く建設後數年を出でずして風雨の侵害を明白に示す所のものとは雲泥の差あることを知るのである。ドームヒユツテの構造は又石造の小屋と雖も内面の板張りを適當に施工することにより全然木造小屋と同様に住心地良きものなることを示すものである。一九〇七年小屋の北東隅の後に石積の便所、一九一二年に南側に塵芥捨場が設けられた。

改築及び擴張

一九一五年ウト支部年報に於て既に予はドームヒユツテは其位置と云ひ構造と云ひ申分なき立派且つ堅牢なる小屋であるがたゞ其の居間の狹隘なることが一大欠點であると述べたのであるが一九一八年の冬に至り予はハインリヒ・ブレイムと協力してドームヒユツテ擴張の設計を立てランダ村ダニエル・ブランチェンの申出に基づき見積書を作成した。同年五月是等の書類は支部總會に於て満場一致を以て承認された。次で會則により設計及び見積書は中央委員會に提出され中央會計に對し總額五、八〇〇フランの豫算中三、〇〇〇フランの補助を要求したのである。代表委員の本件に關する審議は流行政性感冒流行の爲めに遅れて漸く一九一九年五月に至り開かれ代表會は本計畫を承認し三、五〇〇フランの補助金支出を議決した。これ爾來建築費の騰貴の爲總豫算七、〇〇〇フランに増額したるに依る。予は其間ダニエル・ブランチェンと工事の實施及材料運搬に關する契約締結の用意をなしたるも書類の作成捗々しく進行せざる爲予は意を決し本契約の締結に先立ちブランチェンに命じて急を要する工事に着手せしめた。次で予自身ランダに赴き七月に至り契約を締結しこれに依りダニエル・ブランチェンは左記の工事を請負ふことゝなつた。

取壊し及び新規石壁工事

二、一七五フラン

木

七七〇

屋

八〇

硝子及び指物工事

一、一二〇

塗 工
運 搬
合 計

九七

九五八

五、二〇〇フラン

工事竣工期限は同年九月末と定められた。

契約中には補助設備品の運搬は含まれず、又二階の仕上げも契約外となつて居る。予は工事中テレースの工事、舊正面壁の修復、居間の床板の新規張替、其他後に必要を生じたる工事を指定した。請負者ブランチェンは多くの、中には随分無理解なる宿泊者の爲に工事の妨害を受けたること甚だしく經濟的にも損害を被りたる爲、予は已むを得ず契約上には彼の負擔に屬する工事の一部を支部の費用を以て支拂ふこととし従つて約五〇〇フランの豫算超過を來すに至つた。

ダニエル・ブランチェン及び其の息子等はドームヒユツテ建設の功勞者である。彼は三十年前に新築を引受け更に一九一九年の改築も亦彼等の勤勞に負ふものが最も大きいのである。ダニエル・ブランチェン及び息アルフレッドは現場及び工場にて大工並びに指物工事を擔當し他の息カミール、ハインリヒの兩人は夏の間フェスチに止まり前者は壁工事に後者はモルタル工及び運搬に従事した。尙アドルフ・ブランチェンは扉及び窓を供給した。就中木ヒユツテの改築に當つてチユーリヒの美術家オイゲン・マイステル（既にカドリモヒユツテ及びアルベルトハイムヒユツテに於て彫刻及び内面裝飾の方面を擔當したる人）の努力に俟つものが大であつた。

又アルベルトハイムヒユツテ同様設計の藝術的完成と現場監督に就ては建築家ハインリヒ、ブレームが予の助力者であつた。

工事の進行は左の記録に依りて明にすることが出来る。

一九一九年六月一日 運搬開始

六月十日より二十五日 石工及び砂用意、セメント、角材、板及び器具運搬

同二十六日より三十日 新正面切妻壁の基礎工事

七月二日より三日 舊正面切妻壁の取壊し、内面板張り窓及扉を其まゝ残して舊正面を假仕切りとなす。

同四日より十八日 新正面壁の積上げ及び石造腰掛。

七月二十七日 新規屋根完成（但し亜鉛板葺を除き）

八月十三日より二十日 石垣及び石造卓子の積上げ、小屋前テレースの造築。

同二十日より三十一日 新舊正面壁の目地塗り。

同十五日より三十一日 彫刻及び塗り工事。

八月十二日より九月二十日内部仕上げ。

九月二十一日より二十二日 設備、工事切上、請負者プランチンに支拂

ヒユツテ改築の方針としては在來の部分を出來る限り利用することとし、充分なる居間の廣さ、獨立の炊事場、防風扉樂に昇降出來る二階を造ることとした。二階には寢床を設けて階上の寢所をも快適なる様仕上げられた。

小屋の前のテレースは訪問者に先づ居心地よき感じを與ふると同時に小屋と其周圍を調和せしめ且つ小屋の周圍を廣くすることに向つてドームヒユツテの場合に於ては特別の必要があつたのである。尙之に伴つてヒユツテは全体に向つて住居としての感じと快適なる氣分を加味し、構造は最も素朴なるも建築的には充分に意匠を洗練し簡單なる藝術的裝飾を施すこととなした。幸にハインリヒ・ブレイム及びオイゲン・マイステルの手腕により此目的は達せられたのである。小屋の間取りは設計圖にて明白に表はされ特に解説の必要も無いことゝて之を省略する。

建 築 費

一八九〇年新築及び後の修繕費は次の表の示す如くである。

建 設 費

建 築 費

亜鉛板屋根葺

一五二フラン

三、五五六

八三〇

新 規 屋 根	一、三八〇
便 所	二二五
塵 芥 捨 場	三八
小 計	六、一八一フラン
修 繕	五七九
到 達 路、標 識 及 導 標	八七八
設 備	一、一九二
舊ヒユツテ支出合計	八、八三〇フラン

一九一九年改築費用は左の如くである。

プ ラ ン チ エ ン 請 負	五、二〇〇フラン
追 加 及 び 賞 與	一、一一八
其 他 工 費 及 購 入 品	一、三三八
設 備 及 ス ト ー プ	一、〇五〇
印 刷、寫 眞、旅 費 其 他	八三七
設 備 補 充	九五
小 計	九、六三七
ド ー ム ヒ ュ ッ テ 總 支 出 額	一八、四六七

改築費の見積額七千フランに對し實際二千六百餘フランの豫算超過を來したる理由は建築費が騰貴せることの外工事中に於て豫期しなかつた多くの餘分の仕事の必要が生じたこと、設備購入費の増加及び前記プランチエンに對し負擔輕減をなせるによる。ウト支部は爲に中央會計に對し補助額を四千五百フランに増額することを申請しゲンフ及びアーラウの中央委員會も其正當の理由あることを認めたのであるが一九二〇年十一月シュウイツに於ける代表委員會にて多數の意見により「富貴なる」ウト支部自ら之を支辨すべしとの事に決定したのである。ウト支部は普通の意味にて「富貴」ではないが犠牲の精神に富む所の會員に富めることは疑ふべからざる事實である。

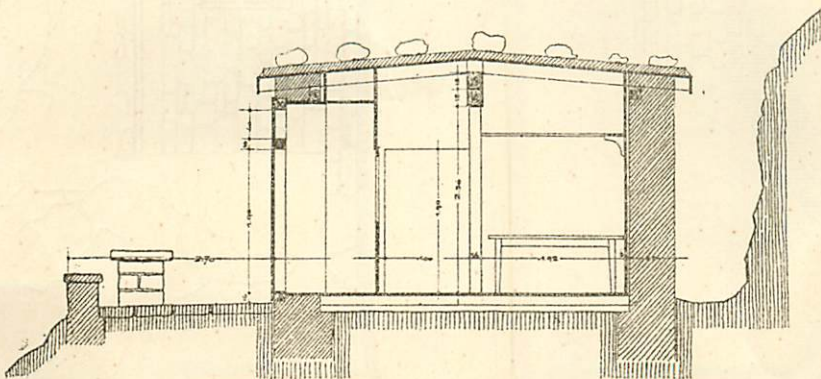
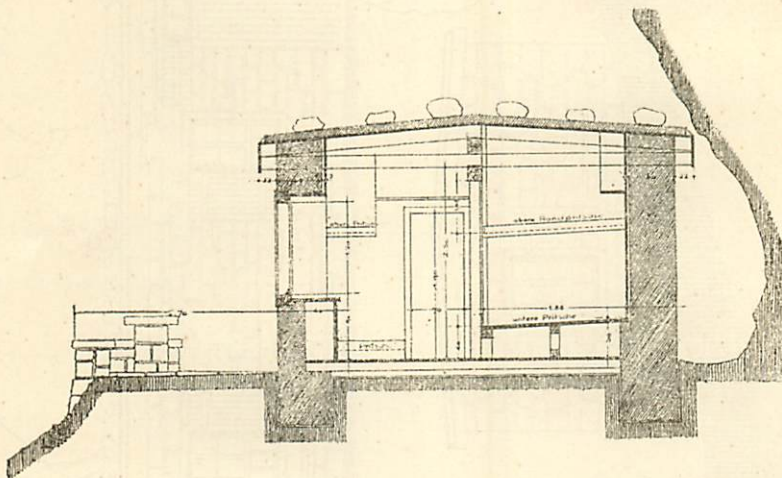
SPANNORT HÜTTE

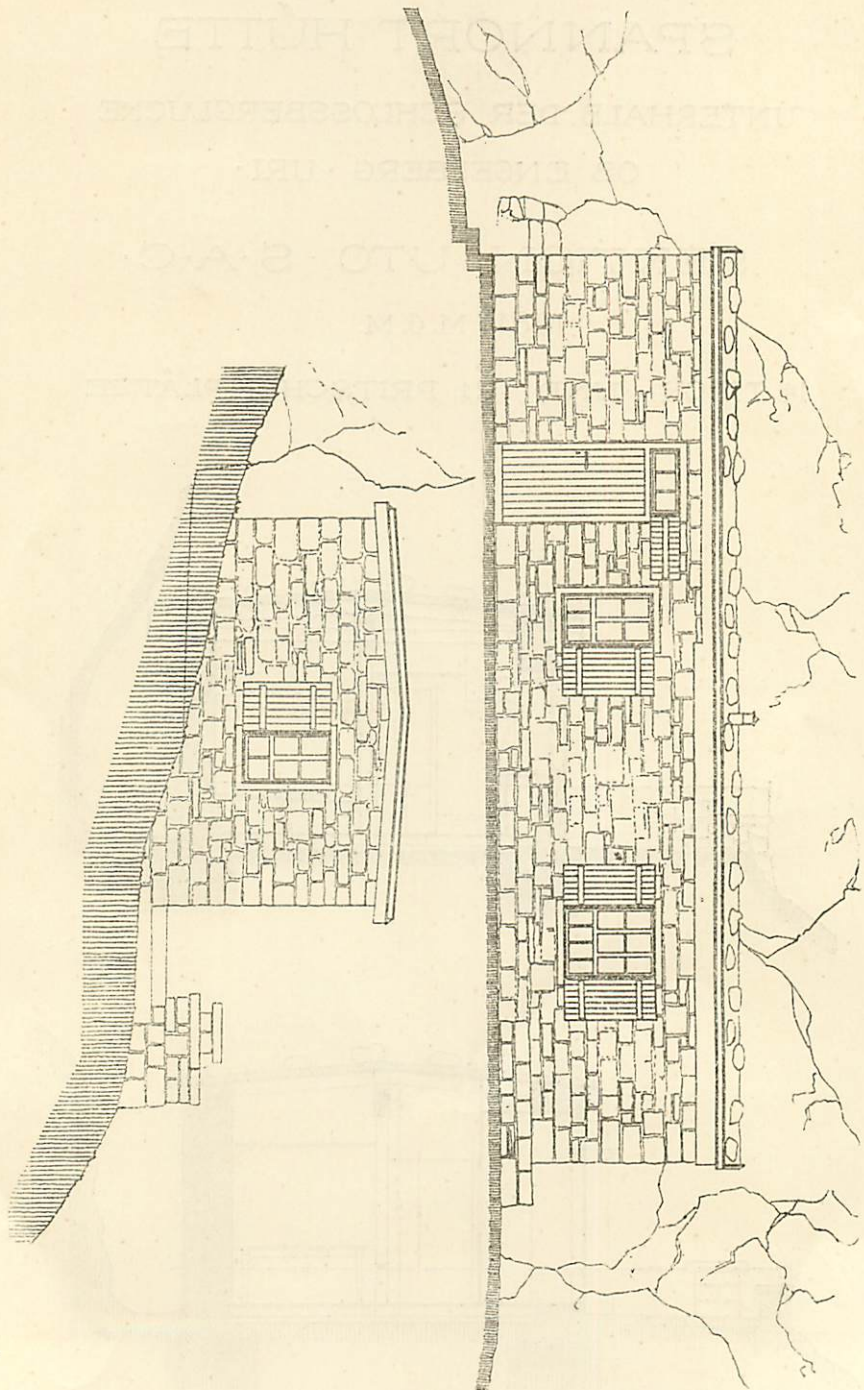
UNTERHALB DER SCHLOSSBERGLÜCKE
OB ENGELBERG · URI ·

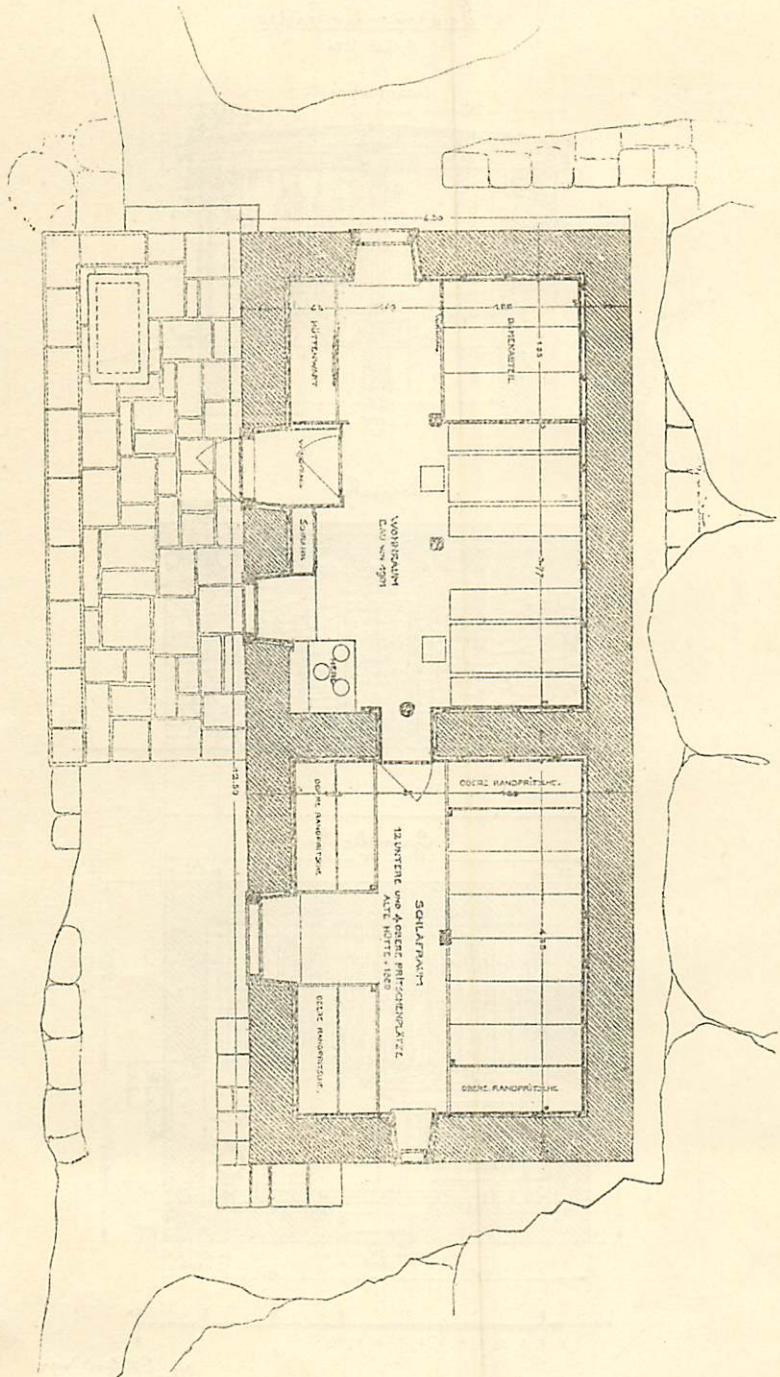
SEKTION UTO · S · A · C ·

1981 M. Ü. M.

14 TISCH - UND 21 PRITSCHENPLÄTZE

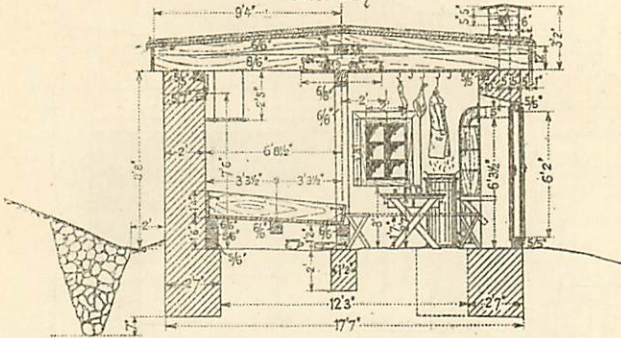




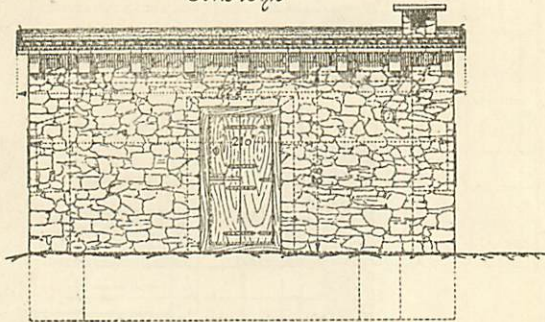


Spannort-Hütte
S.A.C. (1120)

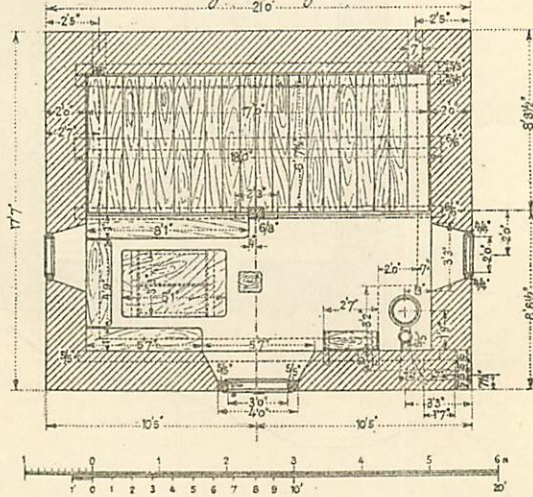
Auerschnitt



Ansicht



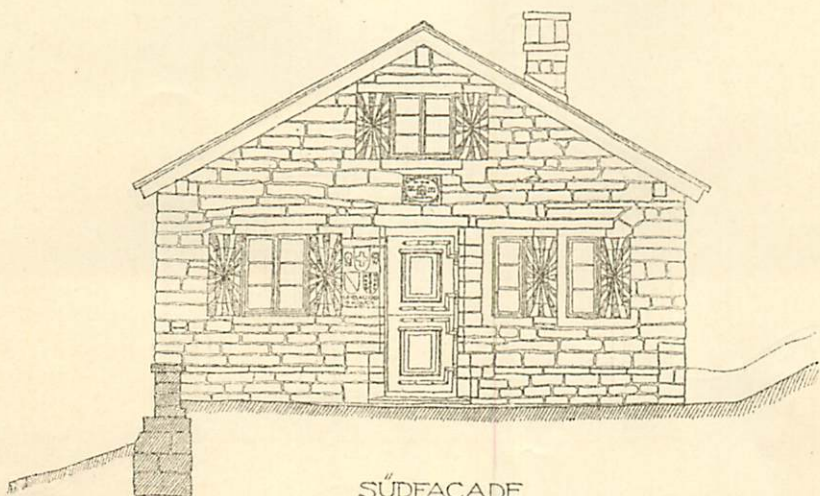
Grundriss



1/80. Carlhard Inge

DOMHÜTTE
AUF DER FESTI OB RANDA · WALLIS
SEKTION UTO · S · A · C ·
2936 M.Ü.M.

16 TISCH- u 24 PRITSCHENPLÄTZE



SÜDFACADE

スキー滑走法に就いて

栗谷川平五郎

私は心から残念に思ふ。それは山とスキーの第百號を以て廢刊になつた事である。

此の書物は全く私達スキーヤーに取つて、どんなに多くの指導してくれた事か知れない。何故に廢刊になつたの深い理由は知らない。併し止むを得ない事情の爲と私は考へる。全く此誌の廢刊は日本スキーヤーの一大損失である事は云ふ迄もない事である。併しながら又此處に再び姉妹の様な書物が早速發行された事は我が國スキーヤーの方々と同様に私は非常に嬉しく思ふ。此の誌を發行するに當つて努力されました方々に對して心から感謝に堪えません。更に努力を續けられて此の誌が我が國に於ける最も重要な機關となつて、今後新しく次から次と生れて來るスキーヤ

ーに對して正しい眞直な道を教へて行く永久の指導者たらん事を私は祈つて居ります。

私の様な浅い經驗の者が此の重大な任務を有して居る誌の第三卷の數頁を費させて頂く事は非常な光榮と存じます。私達レーサーが自己の爲或は母校の爲或は團體のため或は我が國スキー界のために必勝を考へる時、勝利を得るために私達の是非なさねばならぬことは、

第一、完全な節制

第二、練習（雪無きシーズンも含む）

第三、最も合理的なフォーム

以上三の如きは今後とも細心の注意を拂つて研究を續けて行かなければならない重要な事柄である。他の運動競技

に於ても勿論同様に勝つためには此三の事柄は決して離すべからざる關係を有してゐると私は固く固く信じてゐる。

日本のスキーレースが水泳や他の競技と同様に世界レベルに達するためには體質又は條件にも相異なる。私達が外國選手より尙以上に此の三點に努力しなくては決して世界レベルに達することは不可能と思ふ。

私達は小さな感情をお互に棄てて良い所は發表してどしどし世界のレベルに向つて進むべきだと考へます。

私はこゝに第三に就て自分の最も有利だと信じて居るそして現在自分が使用してゐるフォームに對して少しばかり書いて見たいと思ひます。

三段滑走法

是れは最も多くレース中に使用され第一に必要とする滑走法である。何故ならば他の滑走法に比し繼續力を有して居りスピードも決して他に落ちないからである。私は今迄出場した大會に於て全コースの五分の四位（下りを除く）は此の滑走法で走つて居ります。分割的動作で是を表はしますならば、

第一、左足を前方に一歩滑り出す。

（此の場合平地及び緩い下りの所にては丁度スケートをはいてキックする時と同じ様な氣持で眞直ぐ前方に滑り出す。全体重を左脚に移しつゝ強く瞬間的に前出する。出し始めは拇指の元邊に力を入れて居るが体重の移るに従つて足裏全面に体重を移す、特に注意すべき事は脚を前出させる時に單に歩行の場合の如く關節を曲けて、他面より脚を上げて前出させるのでは無く雪面より出来るだけ離す事なく滑り出すのである、但し登行の場合には關節を曲けてやゝ歩行の場合と近き動作をなす。登行の急になるに従つてそうなるのである。）

第二、右足を第一の場合と同様の方法にて前出させる。

第三、後方にあつたストックを前方に振出す。

（位置はスキー先端より五六寸後方勿論此の位置はスキーの長さ、ストックの長短、登り、平地、緩い降り等で相異なる。登りの場合には比較的己の脚に近い所に突く事、此の動作を開始するのは第二の動作とやゝ同じ位に開始する。）

第四、遅れてゐる左足を引付けてくる。

(右足の位置まで来た時に右足全体重の半分を左足に移す、片足に全体重を載せて次の第五の動作を行ふ事はスピードを鈍らせるからである。)

第五、前出されたストックに全体重を加へる様な氣持で後方に全力を以て強く押す。

(滑走中に於て第五の動作が最も重大で此の時最もスピードがあり長く滑つてゐる時なのである、勝敗はこの時のスピード如何にあると云つても過言でないと思ふ。

此の場合にストックで押すに必要な丈け腰を曲げそれ以上曲げる事は切角出したスピードを減少するから充分注意すべき事と思ふ。此の缺點は最も多くの選手に見受けられる様に思ひます。又ストックにて押す場合に自分の手が体より後方に行く時に力を入れる事は確かに良いが、外國選手は又非常に此處に力を入れられるようですが併し我が國民の習慣上として自己の体まで引く力は外國人に對してより強いが押す事は弱い事である。だから我々は充分此の點に注意して引くまでを最も大切な時機とすべきと思ふ。昨年あたりわざと後方にのみ力を入れやうとしてスピードの出ない人達を見受けたのは直接眞似た缺點と思ふ。勿論

後方に力を入れる事が最も自分に合理的になつて時にはそれが良いとは思ふが、又自然にそう行ふべく努力して行く事は良い事だが、急に取入れる事は決して賢明な方法とは思はれません。

以上で一回の滑走は終了した譯であります。此の滑走法の力の働く動作を示すならば、

第一左足、第二右足、第三兩肩(腕を含む)以上三つの運動に依つて進行されて行く譯です。一つの動作を行ふ場合に他の二者を完全に休息させる事が必要であり又私達はそなすべく練習して行く事が大切で注意すべき點である。

私はこゝで特に申し上げたい事は、高橋次郎氏著「アルベルグスキー滑走法」に於ける從來まで二段滑走、三段滑走と言われてゐたのを、著者が特に二步滑走、三步滑走と改めたいと申されてゐる事であります。私は二步滑走、三步滑走と改める事に依つて新しい選手達が間違ひを起すのでは無いかと思ひます。三段滑走を歩數で計算したならば決して三步でないと思ふ。二段滑走の場合も同様であります。現に又著書の中にも二段滑走の場合(アルベルグ三

第一、右足を前進させる。

第二、左足を引き付ける。

第三、杖にて後方に押す。

と書かれて居ります、是れは歩数で申しますならばおわかりの通り一步であります。だから私は二歩とする事は新しい選手が更らに右足を一步出しまして一歩づゝ多い滑走を行ふに到る大きな失敗を來すのでは無いかと思ひます。この滑走に於ける力の働を申しますならば、右或は左足一回に對して杖一回と云ふ二回の動作であります。ですから特に改める事なく以前通り二段滑走と申す事が正しいと思ひます。

三段滑走の場合にも同様である。現在の選手間にも可なり此の大きな間違がある事を見受けますが是れは三段滑走に於きまして

左足前出―右足前出―左足を引き付けてくる、体重を右足より半分移す、そして少しばかり（三、四寸）前歩に書いてあるのを普通の如く一步出す事が原因してゐると思ひます。一步違つて行ふと云ふ事はスピードに非常な違を來たし此の點充分注意すべきことで練習中は一般に足が出過

ぎる傾向があります。で私は前に述べた三段滑走法の所に此の三、四寸足を出す點を特に除いたので、それは兩脚を平行にして行ふ様練習してゐても三、四寸以上も足が出過ぎる傾向があり、初期には是非平行にて行ふ積りで進まれない事を切望致します、出過ぎては何故に不可かと申しますならば兩脚に平均に体重を加へる事は不可能であり、即ち一本のスキーで滑走する事は非常にスピードの點に於きまして不利であり切角合理的に行はれてゐる三段滑走の動作が左脚二回、右脚一回、肩と云ふ譯で一滑走中に左脚を二回使用する事となり不合理である、スピードも又一方多く脚を使用する丈け落ちます。

二段滑走法

この滑走は平地及び多少の降りに適すると考へます。併し此の滑走法は非常に肩を使用する割合が多いので長く繼續して行くことは三段滑走に比して困難であります。此の滑走法に就いては高橋氏著の「オールベルグスキー」にも詳しく書かれてありますので簡單に致します。

第一、右脚前出さす。（出す方法は三段滑走の場合と同

様)

第二、左脚を引き付ける。(体重を移す)

第三、杖にて後方に強く押す。(杖を出すのは第一動作に殆んど同じ位に行はれる、押すとき又は押した後は三段滑走の場合と同様)

尚ほ躍進滑走法などもありますが、他の書物にも詳細に書かれてありますので、特に此處で述べません。此の滑走法は正しく行ふ事は非常に困難であり、左程迄にも必要とは考へません。但し變形の躍進滑走法としては現在我が國選手の中にも多く使用され又好成绩をおさめてゐる。で此の變形躍進滑走法は未だ統一されて居ないために明かに動作を分割する事は私には出来ません。

私は最後に當つて再び

第一、完全節制。

第二、練習(雪なきシーズンも含む)。

第三、合理的フォーム

の三者をレジャーは其の一つをも缺く事無く一日も早く我國のスキー界が世界レベルに達する事を祈つて居ります。

(完)



距離競技用縮具の二三に就いて

高 橋 昂

ベルゲンタール縮具に就いて

異様な縮具の出現に驚異の目を瞠つたのはたしか大正十三年秋、當時はアルバイン式ほつ／＼姿を消してウキツトフェルト式の全盛のこととて顧みるもの極めて少く、唯僅かに二三の識者の試験物に過ぎない様な状態であつた。ために當時日本に於ての特許権所有者は利益を擧げ得ずして權利の放棄を餘儀なくせしめられてゐたのである。

而してその後の日本スキー界の目覚ましき進歩は日本選手オリムピック競技参加とともに、各種ワツクス發明、塗蠟法の進歩はスキー界に一大躍進をもたらし、昨冬の距離競技にあつては其の出場者の大部分が此の種の縮具によつて占められてゐた。此の縮具が今日の形を示すまでには

可成多くの徑程を経て來たことは競技會に於けるベルゲンタール氏の偉名とともに永へにオスロー市のスキー博物館に藏せられてゐる。この優秀な縮具も塗蠟法の不備からして日本に於ては一時放棄の形になつてゐるが、一度優秀を世人から認められ再生するや利に敏い某氏による特許權の讓受けとともに識者をして寒心せしめたのである。

ともあれ私は其の特許權のいきさつに就いては今更述べない。

唯 N・S・K なる商標を刻せられた此の縮具が、確實を必須とする競技用としての使命を失ひたる粗惡極まるものであるがために、幾百、幾千の競技者をして徒らに悲しめ、延いてはスキー界の進歩を害せんとするは注目すべきことである。此の優秀なる縮具も日本に於ける特許權にからまれ

て吾等は来る冬も心痛せざるべけんか。

ゼーベルグ、ベルゲンダー縮具

此の縮具は去る冬ヘルセット中尉の一行によつて日本に初めて紹介せられた。

昭和四年度のスキー競技は此の北歐の三傑を迎えた翌年のこととて、總てに於て著しき進歩を示したが、わけても此の年の札幌は全國學生大會、全北海道選手權大會、全道中等學校大會、御來道記念大會等と、五〇基米一回、四〇基米二回、十八基米四回と云ふ様な前例のない大競技が開催せられたのであるが、一方には各競技とも極めて縮具の故障による棄權者の多い年であつた。此のことは昨年のコースが例年に比較して極めて困難であつたことも事故を多からしめた一因となつたであらうけれども、一面には縮具の製造法が極めて粗悪であつたと云ふことも亦見逃し得ない事柄である。又縮具その物の構造からして故障を起したのではないかと考へらるゝものが此のゼーベルグ、ベルゲンダー縮具である。

昨年の競技者の多くは縮具を盲目的に愛用した。けれど

も結果は思わしいものではなかつた、けれども誰もが其の縮具を捨て様とはしなかつたらしい、北歐の三傑が用ひて居た縮具だけに。そうして其の多くの者は或は製品の粗悪を難じ、又或る者は靴底皮の不完全を其の原因なりとしてゐた様であるが此の競技途中に於ての不慮の原因を靴底の不完全と相まつて其の根原は縮具の構造そのものにあるのではないかと思ふのである(次圖の如く)此の縮具が靴底Cをおさえてゐるのは、B點とD點の釘とであるが、B點はAを中心とする振子の運動をなす故に、歩行に際して、靴底Cの力は主として矢の方向に働く。これをBが下方に壓して、靴底Cに、Dの釘の先端が喰込んでスキーから靴の脱出を防いでゐるのである。少し永く履いてみると靴底は水を含んで次第に柔軟となり、Dを中心とする靴底Cの前後運動(主として矢の方向)は次第に増す。一方此のDを中心とするCの前後運動の量を増すならば、Dの先端が極めて鋭利であるために、靴底Cは容易に前方に向ふて切り破かれる。此の場合に於ける最大の力は恐らく轉倒であらう。此のCの前後運動を或る程度に防ぐ目的からして、AB、Aとして靴底Cを下に壓下する力を増す如くにしてある

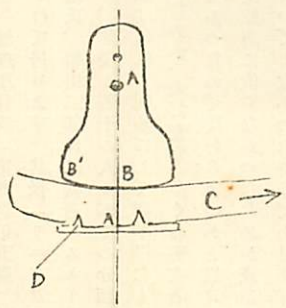
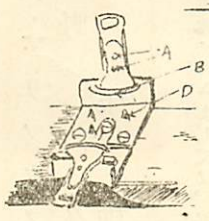
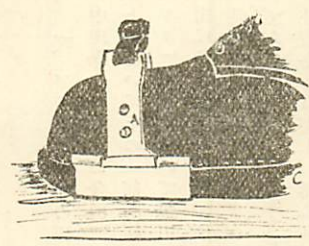
が、ABとAB'の差と、靴底の厚さ、皮革の強さの程度等の關係については極めてデリケートであることも一考しなければならぬ。轉倒時の力の大きさは想像以上に強さのことがしばしばある。こんなときには恐らくBとCは一緒になつてAを中心として或る一定區間を運動し、それ以上の力に耐えかねてCはBの下面を這つて（スリップ）Dの先端から後脱する。

一度此の締具から後脱した靴底には、大きな釘の溝が前方に向ひ作られる故に、幾度締め直しをやつても後脱してしまふ。

第二回オリムピック競技會に於けるノルウェーの選手連は大長距離にベルゲンダール、長距離にはウキツツを用ひて、優勝者は此の二種によつて代表せられてゐた。又同じ年の第四十五回ホルメンコロン大會にあつても殆んど以上の二種のみであつて、極めて僅かの選手がゼーベルグ、ベルゲンダールを用ひてゐたのに過ぎないと云ふことも注目すべきことであると思ふ。

私はこんなことを考へてゐる。ゼールベルグ、ベルゲンダールはベルゲンダールの靴損を防ぐ目的からして其の緊

定をゆるめたものであり、ウキツツはベルゲンダールの緊定の度合を一層深めたと同時に靴の破損を減じた、最も合理的なもの様に考へるが、此の優秀なる締具も北歐に於ては特許權にふれて發賣禁止になつたと聞いて居るが、日



本に於ては之が製作の自由であると云ふことは競技スキー家にとつて極めて喜ばしいことである。唯願くは特許權所
有者のN・S・Kに品質の向上を希望してやまない。

雪

崩

(上)

譯 著 言

一、アンドレ・アリツクス氏のこの研究に關する論文は次の如くであります。

André Allix : La crise de la houille blanche dans les alpes

françaises (La géographie, vol. XXXIX, 1923.)

” : Les avalanches de 1922-1923 en Dauphiné.

(Rev. de géogr. alpine, vol. XI, 1923.)

” : The avalanches. (The Geographical Review,

vol. XIV, Oct. 1924)

本譯文はこの最後の論文に當ります。アリツクス氏はフランスのグルノーブル高山地學研究所 Institut de Géographie Alpine, Grenoble に於いて是等の研究を行はれました故に以下記す所の資料は多く主として之をフレンチ・アルプスに採つて居られます。

アンドレ・アリツクス 著
久野 久 譯
佐々保 雄 補

一、アリツクス氏の研究につきましては、既に早く、先年田中理學士が其著「登山」及び、地理學評論(第四卷第五號)誌上に於いてその一部を紹介されて居ります。其後「リュツクサツク」誌上に於いて藤田信道氏、船田三郎氏は其著「スキー登山」に於いて批判さるゝ所あり、其後も若干の人々がこの分類に言及されて居られます。此等は何れも明易にして要を得たものでありましたが、短簡なりしたためか、未だ充分、多くの研究者の注意をうながし、訴ふ所、少かつたのではあるまいかと思はれます。又そのうちの或ものは原著に依らなかつたためか或ひは原意を誤り傳ふるの恐れがないでもなかつたやうであります。繙譯的知識の洪水の中に更に本譯章を送りますのは、其等に對する補遺の意味に外なりません。隨つて譯は可及的直譯に近からしめましたために行文生硬の點多きを恐れて居ります。

一、アリツクス氏の研究は勿論之が決定的な完成せるものではないことは氏自らも述べて居らるゝ所です。然し、氏が雪崩落

下の諸フェイス、特に其起發時の状態や、堆積形式にも觀點を置いたと言ふことは、今にして見れば當然とは言ひ乍ら、確かに大きな貢獻であつて、從來の雪質や運動形態にのみ感覺的に注目せるものに一步附加して雪崩分類の完全せる未來を約束するやうに思はされます。更に最後の章に説かれる雪崩豫察のための氣象要素との對比に關する氏獨自の見解には充分刮目すべき點が見られるやうに思ひます。

一、私等の批評者としての考へは、又他日に譲りたいと思ひます。只何よりも先づ本文からは其結果よりも其の研究の方法や重點の置き場等について學ぶ所あるを思ひます。かくして私等は雪質、積雪状態、發生、落下、推積等の諸相を各次元として地形や氣象要素や引金となる機械的作用をも坐標とした各種の可能的な組合せを理論的に設立することに依つて始めて雪崩の眞相をつかむことが出来ることとせう。更に將來の研究は、之等諸相の原因とその機構を組織づけることによつてその完成にまで至るのではないでせうか？。

本 文

一九二三年十二月の末、多數の雪崩がフレンチアルプスの山谷を荒らし交通を妨害したことがあつた。ウアサン

Oisans とブリアンソンネ Briançonnais に於ては多くの道路と鐵道が中斷され、上タランテイス Upper Tarentaise では一村全部が埋没されて家畜全部と、數人が命をうばはれ

たのである。又上モウリエン Upper Maurienne では最奥の村が五日の間他村と交通をとざされたり、フランスよりイタリーに行く國道や、其他重要な道路も中斷されたほどである。この一九二三年の最後の一週間に於けるフレンチアルプスだけの損害は、十四人の命と、殆んど百万フランに達した。

この様な災害は決して異常な事ではなく、高山地方には冬の間、幾度も起ることである。山にはかならず、毎年決つて雪の落ちる谷があつて、たゞ年によつて雪崩の大きが異なるのみである。通常の年は大きが決つて居り損害も殆んどないが、時々例外的に珍事を惹起す程度のものが出て來るのである。又同じ冬に、同じ谷に小さい雪崩も、大きい雪崩も起ることもあり得る。この様に雪崩は頻繁に起り週期性を有し、山地に常に損害を與えるものであるから、ヨーロッパの山間ではかなりよく研究が行はれて來たのである。

雪崩に關する研究

雪崩の研究に關しては、最近注意すべき文献が五十以上

出て居るが、その中、十七は佛人、十一はスイス人、十一は獨及び奥人、八は伊人、三は英人によつてなされてゐるコアツ Conz とハイム Heim (共にスイス人) の基本的な研究をのぞいては、皆近々二十年の物である。この文献の大部分は雪崩を最も恐れ、又最も直接に觀察の機會のあるアルピニストやスキーランナーによつてなされた。引つゞきスイスやフランスの營林署員によつて研究は行はれてきてゐる。

前スイス治水營林署長であるコアツ博士の業績は今尙之等研究の中で主要の位置を占めてゐる。フランスの林務官もこの問題につき、近來注目すべき文献を發表してゐる。

最近に氷河學者や地理學者も價值ある貢獻をなしてゐる。これら科學的な研究の三つのカテゴリー(即ち、登山者、林務官、學者の研究を指す——譯者註)の外に、紀行文や通俗の讀物等の中からも、貴重な智識の得られる事が多くある。

しかしながら第一のカテゴリーの若干や他のその多くは皆共通のものより由來せりと見做されねばならない。即ちそれらは皆、コアツの研究のあとをうけてゐるので、し

かして又未だ何人も決定的な解決を與へたものはないのである。それにはこの雪崩の問題はあまりに廣漠たるものであるのである。本文も決してその徹底的な試みではなく、只單に全体のアウトラインを與えるのを目標としてゐる程度である。しかしその中には、着眼點の新しい所もあると思ふし、同時に分類と云ふ難問題も、又今まで注意されなかつた雪崩の豫知問題に於ける特別な狀態の論議も解決される所あらうと考へる次第である。

雪以外に起るアバランチ

雪崩 Avalanche なる名……或ひは、その同意語たる lavanches, laves, laines, lavi, lawinen, valange, 等は甚だ色々の現象を意味するがその吟味は本研究の範圍外に屬する。それらは年中あらゆる時期に起り又雪のみならず他の物質にも突發する。これらの色々な現象に、共通の一つしか語がない事は、少くともその外觀、災害に似た點のある事を證する。それは實際は物理學的にも地理學的にも大いにちがふのであるが。その中で土送り Earth slide は最もよく雪崩に似て居る。土塊が迂り始めた際なほも凝

集力を有して居るならば、それは、水平面の變化以外には外見上何等變動のない一塊又は集塊として運動を續ける。

これは佛の著者による土送り *fatrasse* であつて、雪崩の初期によくある板狀雪崩 *planché (board) of snow* によく似て居る。もしも、土塊が十分長い距離を迂るならば、それは粉々となり、流動體の如き運動をする。これは底雪崩 *round avalanche* に見られる過程に似たものである。地送り *land slide* 又は山くづれ *Bergsturz* なる語は不幸にも以上の二つの場合に共通な名である。多少異つて居るが運動が似てゐてやはり同一種類に屬するのは、岩石流 *rock flow* で、又その運動が急激なものに火山熔岩流、遅いものは、氷河がある。この二つの場合は、共に土塊に水が滲み込んで粘着性の液体に似た運動をする。スイスやアメリカでは岩石流 *rock stream* の名でよく研究されてゐるものである。

又一方熔岩流 *lava flow* は、名の示す如く、同じやうな運動を行ひその火山岩滓や、火山灰も *dry avalanche* として研究され來たがその性質は雪の *avalanche* と殆んど同一である。最後にすべての登山家の知る如く、氷河の懸

崖は夏季に離れ落ちて夏雪崩又は氷河雪崩 *summer avalanche or glacier avalanches* を起す。これを起す狀況は、通常の雪崩と異つて、迂るといふより、むしろ氷の落下を意味する。プロシユレル *J. Brocherel* は最近氷河滑落が、その上に、岩石が落下した事によつて起された例を見たと言つて居る。この場合、眞の氷河の溢流は例外として、アルプスに於てこの種のアクシデントは、高所に起るために雪の場合程著しくないのである。

雪崩の分類

從來幾多の、雪崩の分類が企てられたのであつたが、未だ充分満足といふのはないやうに思はれる。各著者はそれ／＼別々の系統をたてゝ分類して居る有様で、新しい研究毎に新分類のないことはない。しかし實の所、これらの分類は互に類似して居つて、と言ふよりもむしろ一つの原型を元として居る事も認められるのである。即ち、最もクラシツクな分類、表層雪崩 *avalanches de poussière, aval de surface* と底雪崩 *aval. de fond* とを元として居ることである。

又ヘック Hoek は粉狀雪崩 *powdery avalanche* と塊狀雪崩 *solid avalanche* としたが、後者は底雪崩 *ground avalanche* とした方が正確である。このコアツ博士及その追従者の分類は科學的な形を具へ從來登山家の認めてきた立派なものである。之は十六世紀にジムラア G. Simler が、十六世紀にはシヨイヒツア Schenelzer が既にかゝる考へを表はしてゐたのであつた。ツダルスキイ Zdansky は、通常の意味の底雪崩はかならずしも、雪層全体を動かさず又かへつて粉狀雪崩は時には、地表にまで及ぶ事あるを述べた。又其後ヘックはこの二つの語に正確な意味を與へた。即ち、粉狀雪崩は「軽く細かな新雪で形成され」底雪崩は「濕つた緻密な、膠着した雪で形成される」とした。パウルク博士 Paulke はスキー便覽 *Manual of skiing* に於て粉狀雪崩、底雪崩、粉狀底雪崩 *powdery ground avalanche* *avalanches de fond* *pondreuses* を區別し更に、ツイグモンディ Zsigmondy の有名な本の第四版には「アルプスの危険」*Die Gefahren der Alpen* を指す——譯者註）雪の状態に基く分類を提示した。即ち新雪々崩 *Neuschnee Lawinen* と舊雪々崩 *Altschnee Lawinen* とである。しかして、更に

新雪々崩を、乾燥雪と濕潤雪とに分けた。又マイエル・フオン・クノナウ Meyer von Knonau は次の四つに區別した。即ち粉末雪崩 *Staublawinen*、底雪崩 *Grund Lawinen*、緩流雪崩 *Schleich Lawinen*、急落雪崩 *Schlag Lawinen* である。又ユラン V. Hulin は次の六種を認めてゐる。即ち (1) 粉狀雪崩 *volante (Staub)*、(2) 底雪崩 *terrière (Grund)*、(3) 複合性雪崩 *mixt* (前二者の混合型にしてパウルクの分類にもあるもの)、(4) 緩流雪崩 *rampante (Schleich)*、(5) 板狀雪崩 *entuite (Schlag)*、(6) 表層雪崩 *de surface (Oberlawinen)* 等であるが、但しユランの場合には雪球雪崩 *balling avalanche* を含む。最後にマックス・エクスリン Max Oechslin の提示した最後の分類は、再び最初の分類に歸つて、表層雪崩と底雪崩とに分つた。

これらの分類は多く同様な觀察より出て、一般の表現法を使用したもので、實見上の性質を表はしたものである。多くの人、殊にムヂアン M. Jaquin はどのカテゴリーにも入らぬ、複合型のある事を主張して居る。實際、以上どの分類も問題を一方よりのみ考察したる故に、決して充分のものではないのである。これらの分類は、いづれも、落下

の方法を主にし、雪の状態をおろそかにして居る。一方バウルケ・ツイグモンデーのは、その反對の立場を取つて居るのであるが。(以上の分類は、登山行第五年に故大島氏が詳しく述べて居られるからぜひ参照せられたい。——譯者註)

合理的分類法

扱て、以上の二種の分類要素を結合する唯一の方法として、縦と横を互ひに組み合せた表を以つて、あらゆる可能的な雪崩の組合せを作る事を行つた。この表に於ては、自身の個人的經驗と、科學的文獻とによつて知つたすべての雪崩の形式を入れんと企てた。雪の状態に關しては、パウルク・ツイグモンデーの分類はそれが現在までのその方面に關しての唯一のものであつたが、こゝには採用しなかつた。なぜなら、雪の新舊はその密度の推量以外にはいかなる状態なるかを指示しないからである。新雪でも、濕雪 warm と乾雪 cold 即ち濕潤、乾燥の差によつて、大變違つた型の雪崩を生ずる。

故に今のべた差異即ち乾濕が雪崩の性質を支配する根本

のものと信ずる。乾濕を區別するには、登山家に知られて居る所の經驗上からの分類を採用したい。この問題については意外にも今までの多くの理論家あまり論じて居なかつた所で、唯、シリアル・ラボ Charles Rabot は之についてすべて乾雪雪崩 *avalanches froides* と濕雪雪崩 *avalanches de chaleur* (私の *avalanches chaudes* に相當す) とに分けた。但しこゝに「濕」「乾」は全く比較的のものである。この登山家の分類は用語の互ひに相容れぬ唯一のもので即ち組合せ出來ぬ所のものである(乾と濕の對立を示す——譯者註)

乾雪雪崩はコアツによる粉狀雪崩のすべてを含む。即ちこれは單なる表層雪崩よりも多くのものを含んで居て、乾雪雪崩は乾燥雪の運動を包括して居る。これは冬に起り、且最も多く、嚴寒の時に生じ、そして殆んど常に氣温の低下に一致して突發するのである。

濕雪雪崩は融雪 *thaw* を起すやうな氣温になつた時にのみ起る。それは濕潤雪の運動を包括して居るが、しかも、それは一般に考へられて居た所と反對に、春には勿論冬にも起り得る所のものである。故にこれを冬雪崩に對して春

雪崩とするのは誤である。温雪雪崩はコアツによる底雪崩の大部分を含むのである。

落下状態によつて分類する時は、成長不完全な、即ち起発の時期内で止まつて了ふ雪崩に對して困難が生ずる。板状雪崩の如きは、この最も普通の例である事は登山家のすべてが知る所である。

さて私は次の分類をなすに當つて特に雪崩の發展の時期に立脚して行かうと思ふ。ハイムは以前に起發帶、落下帶、堆積帶 *Abrißgebiet*, *Lawinenzug*, *Lawinenkegel*, *Zone of departure*, *course*, *arrival*. (7)の譯語はハイムの原語と相違するが、アリツクスはこの様に譯せる故に、譯者もこれを用ひる)と區別したがしかし分類の基礎とはしなかつた。かくして、落下の經過と、停止後の状態によつて示される色々な型を區別出来る。——それは従來の分類には見られなかつた所のものである。雪崩の圓錐狀堆積も雪質地形、落下状態等によつて種々の型が出来る。

起發帶 *Zone of Departure*

スキールランナーは雪表面の變化に非常に注意して居る。

雪が氣象状態と一日内の時間によつて、堅さ、密度、粘着度を速かに變化するのに見慣れるのは割合に容易な事である。起發帶即ち出發區域に依つて雪崩を分類するには、この雪の状態の變化を考に入れなければならぬ。

乾雪雪崩 *Cold avalanches*

乾雪は新しい軽い雪でも、古い壓縮されたものでもよいが後者の場合には、多くは凍結して、多少氷の多泡性なものになつて居て、この様な雪が迂るのは例外的である。乾雪雪崩は、凝結性の無い軽い雪にのみ限られる。雪は直接地面に接して居てもよい——これは雪崩發成には便でないが、かならずしも妨げとならぬ。もしそれが古い堅い雪の上にあるなら非常に迂るには有利である。これが、乾雪雪崩と、表層雪崩とを混同し易い所である。

この雪は凝結性の少ないのが特徴である。それは雪全層にわたつて粉狀であるか、又は表面は堅い薄いクラストを被つて居て、その下が粉狀であるかである。もう少し壓縮して居るなら、スキーの重みで固まり、碎かれる。この場合には雪は再び均質となるか又はクラストとなる。マツク・エクスリンによれば、新雪は〇・〇七の比重を有し壓

縮された雪（降雪後二日）は〇・二〇であるといふ。粉雪の雪崩は稀であるといふのは、雪は、降雪後、數時間で性質が變り、凝結性となるからである。

ハイムの引用したシユラギントヴァイト Schlagintweit は、雪球雪崩 *balling aval* (*avalen boule, rellaor*) を一つの型として居るが、ユランは、これを表層雪崩の特別な場合とした。實際に、この種の雪崩は稀で（特に乾雪には）大した大きさにもならない。他の物体が雪の上に落ちると雪球を形成し落下しながらさらに雪を附着せしめて成長するがもし雪に粘着性があるなら雪球は常にあまり遠くまで行かずに停止する。これは摩擦と粘着力が運動力に勝るからである。又一方雪に少しばかり粘着性があつて、しかも、少し運動を起させればよい状態の下にある時は、雪球の轉落は通常の雪崩を起させるに十分な刺戟となる。ノーマルな雪崩の運動は殆んど常に團狀塊雪 *Globular lump of snow*, *Erolis* を生ずる。

低温緻密な雪は最も普通な乾雪雪崩の稚形なる板狀雪崩 *snow board, planche, Schneebrett* を起す。積雪層は多數の平板に斷切つた如き外觀を有し、その大きさは百米四方も

ある。この象眼細工とも呼ばれるべきものは、氣温の變化の爲の收縮と膨脹の運動によつて出来る。これは大多數はラストした雪に生ずるが、この事が必要な條件ではない。登山者達の一列の深い足跡を刻む位の刺激で、この象眼細工の一つが迂り落ち始める。それは小銃の様な音を立て、破れるのである。比較的粘着した平板の迂る時、當然下の部分を非常に壓縮する。故に雪が「叫ぶ」*crier* と云はれる位にキークーと云ふほど著しい音を立てる。板狀雪崩の下方は、迂りながら、雪をさらつて澤山の渦卷狀の波を起すが登山者はこの最初に來た渦によつて平衡を失ひ、そして足をさらはれ、運動中の雪の中に頭を下にな巻きこまれる。そして泳ぐ運動を續けて表面に出て居なければ、後から續く波に埋められて了ふのである。

雪崩の下の部分では、雪は非常に壓縮され、其の結果凍結をも起す。（チンダルのクラシツクな實驗が示すやうに）そして起發點では輕かつた雪も、その時は、氷の如く、堅くなる。ピエル・ロロイ *M. Pierre Lory* は、ベルドヌヌ *Beldonne* に於て小さな雪崩に驚ろかされた時の話をして呉れたが、それによれば、硬い雪の運動が彼のアイスマツ

クスを手から非常な力でもぎ取つたと言ふことであつた。救助が即座に行はれない時、死が避け得られないものとなるのはこの雪の硬化によるのである。なんとなれば、一度この様に埋まると、再び表面に出る事が出来ない以上はかく凍結した氷で動けなくなるからである。深く埋められた者が、再び表面に出る事が出来れば、よほど稀な幸運と云はねばならない。

かく壓縮され、粉碎され、ひつくりかへされた雪の平板は、粉々に破れて人頭大の圓い塊となる。これらの塊雪(ユランの云ふ *avalanches*) は雪崩れた雪の特徴で、塊雪を形成することなしに、均質なマツスとして落ちることは稀である。後者は特に粉状雪にのみ起るのである。

濕雪雪崩 *Warm avalanches*

濕雪は常に濕潤して居る。故に乾雪より粘着性に富み、且重い。マツクス、エクスリンは、濕つた新雪は〇・四五なる比重を、壓力で緻密になつた古い濕雪は〇・七〇—〇・八五なる比重を有するとした。この雪は多少水氣を含み、且多少粒狀でスキーに着きやすい。又穀皮クラストを破つて居ることもあり居ないこともある。それは一つのマツス

として迂り、乾雪の運動よりも規模が大で、速度は小である。濕雪は決して粉狀を呈しない。もしこの種の雪に雪球が形成されるならば、それは乾雪と全く同じ性質のものとなり、前述の説明はこゝに於ても成立する。

濕雪に特別な雪崩の型は瓦狀雪崩 *tile on tile* (田中氏はこの雪崩を板狀とされ、*snow board*の方は面狀とされた) しかし *tile* の本來の意味から、又後に説明する様な理由から瓦狀とし、スノーボードの方は、從來通り板狀として置く(譯者註)である。濕雪は運動は遅いながら、常にそれが被ふて居る地面上を迂る。(著者註、完全な乾雪にこの種の滑落の見られた事は無い。在るには違いないが、それは粘着力のない爲「瓦狀」となり得ないで粉雪の「瀑布狀」*cascade*のものに變つてしまふのである。)この現象は、傾斜が十分なら冬季、どの家の屋根の上や又すべての雪に被はれた斜面に見られる。積雪の層は滑つて一時、屋根の端に懸つて居るが、粘着力が過重のため負けると、壊れ落ちて、所謂雪の「瓦」が、地上に又は通行人の頭に落ちて來るのである。

この小さなアクシデントは山岳地方に、普通起る事であ

つてそれが爲、屋根には水平な横木が渡してある。

長く續いた斜面では、この湿雪の層が破れると引續いて速かに迂り出し、摩擦と、運動中の雪の慣性によつて限られたある速度まで、速度を増して行く。これは全く板状雪崩と比較し得べきものである。但し瓦状雪崩の方が速度小で又、地表を露出させる點が異なる。これは地迂りによく似て居るから「滑動雪崩」即ち *snowslip* と呼びたい。

これは *loisage* 地迂りの場合同様、わりに短距離で止まりその場で壓縮する事がある。この様な状態は「楯状」*Snowschield*, *bonchild*, *Schneeschild* と呼ばれる。これはヘツク其他の獨乙人が、乾雪板状雪崩に名付けたのであるが私はむしろ、前述の如き雪崩に限りた。もしもこのスノースリップが長く續いて迂る時は、それは雪の波を形成し板状雪崩の時と同じく、破れて塊雪を作る。

雪崩の第二期について述べる前に滑落を起す斜面の傾度について述べやう。ヘツクは二十三度の斜面を危険なりとし、ルートゲルスは二十二度乃至二十五度とし、マックスエクスリンは凍結した禿地の約十六度の斜面に雪崩が生じたのを見たと言ふ。しかしこれは例外で、一般の限界傾度

はヘツクの與えた値であらう。

落下帶 *Zone of Course*

板状雪崩又はスノースリップは、我々の見た所では出發の時期内で停止してしまふ事がある。その時は「短流」*short slip* と呼びたい。もし雪が更に運動を續ける時は「長流」*long slip* と呼ぶ物を生じ、「流氷状」*flow* と變るのである。廣い斜面に、雪の「溢流」*flow* となつて廣がる事は、稀である。多くは、間もなく、又は少し後に谷にもぐり込む。これが雪崩のクウロアル *couloir* 又はテムニー *chimney* である。ホブズ *Hobbs* はクウロアルなる語を、この意味で英語に用ゐた。しかし私は前の語に對してガリイ *gully* 後の語にファンネル *tunnel* (ヘツクによる) を用ひたい。(以下次號)

全日本スキー聯盟代表委員會に 出席して

高橋

昂

第六回全日本スキー聯盟代表委員會は昭和五年十月十七日午後一時より九ノ内日本俱樂部に於て開催、出席者は

會 長	稻田昌植	秋田縣スキー聯盟	出原良吉
常務委員	黒崎三市	長岡スキー俱樂部	松木喜之七
同	村上敏郎	津川スキー俱樂部	廣瀬市次
同	小川勝次	高田スキー團	鶴見宜信
同	沖島鎌三	飯山スキー團	牧野莊右工門
權太中央スキー俱樂部	日黒乙治郎	上田スキー俱樂部	柳澤健太郎
大泊スキー俱樂部	中村新一郎	草津スキー俱樂部	湯本彌六
北海道帝國大學文部會スキー部	同 人	稻門スキー俱樂部	中 川 新
札幌スキー俱樂部	高 橋 昂	沼尻スキー俱樂部	同 人
札幌スキー聯盟	村上敏郎	早稻田大學體育會スキー部	矢澤武雄
小樽スキー聯盟	椎名幾三郎	法政大學々友會スキー部	神代保男
小樽高等商業學校スキー部	吉岡龍太郎	明治大學々友會スキー部	宮川恒夫
青森縣スキー聯盟		法友スキー俱樂部	泉 掬次郎
		信州野澤溫泉スキー俱樂部	片桐知從
		名古屋スキー聯盟	八木澤文吾

立野ヶ原スキー倶楽部 佐藤健太郎
 昭和スキー倶楽部 櫻庭留三郎
 上古志スキー倶楽部 川上 潜
 妙高スキー倶楽部 神岡 新五
 (傍聴) 樺太中央スキー倶楽部下平廣、大泊スキー倶楽部田
 村節郎)
 にして、稲田會長議長となり各提出議案に付いて審議した
 が先づ配付された左の加盟團體年度別會員數一覽表を手に
 して、

加盟團體年度別會員數一覽表(昭和五年十月調)

加盟團體名稱	大正十 五年度	昭和三 年度	昭和四 年度	昭和五 年度	昭和六 年度
樺太中央スキー倶楽部	七五	一五〇	一五〇	一三三	一、一五三
網走スキー倶楽部	六〇	七六	六〇	六〇	不明
三菱美唄スキー部	四	八五	七五	六六	八六
札幌スキー倶楽部	六	八〇	七八	七	六
北大スキー部	一三	二四	二五	二〇	一三〇
小樽スキー倶楽部	七	七四	四〇	二七	二四四
小樽高商スキー部	五	不明	四五	空	不明
青森縣スキー聯盟	一九二	三〇〇	二九七	三〇〇	三〇〇
長岡スキー倶楽部	西	西	六〇	六〇	六〇
高田スキー團	六	一三六	五〇	二四三	一四〇
妙高スキー倶楽部	三	不明	不明	九三	九〇
飯山スキー團	不明	二〇〇	二二〇	一五〇	二六三

草津スキー倶楽部	三	三	三	三	三
稲門スキー倶楽部	九	九	九	九	九
東京帝大スキー山岳部	五	五	五	五	五
早大スキー部	二二	二六	二六	二六	二六
法政大學スキー部	西	西	西	西	西
弘前高校スキー部	五	五	五	五	五
京大旅行部	四	四	四	四	四
大阪スキー倶楽部	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
森山スキー倶楽部	八	八	八	八	八
大泊スキー倶楽部	三三	三三	三三	三三	三三
明大スキー部	五	五	五	五	五
法友スキー倶楽部	六	六	六	六	六
沼尻スキー倶楽部	七	七	七	七	七
東山スキー倶楽部	四	四	四	四	四
名古屋スキー聯盟	五	五	五	五	五
秋田縣北スキー聯盟	三九	三九	三九	三九	三九
津川スキー倶楽部	五	五	五	五	五
岐阜高農山岳部	八	八	八	八	八
秋田縣スキー聯盟	五	五	五	五	五
盛岡スキー協會	三九	三九	三九	三九	三九
信州野澤温泉スキー倶楽部	五	五	五	五	五
立野ヶ原スキー倶楽部	八	八	八	八	八
石川縣体協スキー部	一五	一五	一五	一五	一五
平穩温泉スキー倶楽部	六	六	六	六	六
函館スキー倶楽部	七	七	七	七	七
上田スキー倶楽部	五	五	五	五	五

昭和スキー俱樂部	上古志スキー俱樂部	朝鮮スキー俱樂部	札幌スキー聯盟	元山スキー聯盟	計總團體數	計總人員數
1	1	1	1	1	5	2,340
1	1	1	1	1	5	2,583
1	1	1	1	1	5	3,422
1	1	1	1	1	5	4,355
1	1	1	1	1	5	5,279

特記すべきことは樺太中央スキー俱樂部の會員數の移動の極めて劇しいことである。即大正十五年度の七五〇名に對して其翌年には一舉に六〇〇名の減少を示して、同四年は減少なし、同五年は三七名減の一三三名であるのに對して昭和六年度は其の十倍に近き一、一五二名と云ふ驚くべき増加を示してゐる。會員數の増加は即俱樂部の隆盛を示す喜ばしきことなれど、過去の劇しき實例は俱樂部の内容の不健全の明示ともよにやがてはスキー聯盟の動搖をも來たす。此件に關して青森代表の吉岡氏より聯盟會議に計るところありしも氏の意見にして採用されなかつたことは遺憾である。

一、新加盟申込承認並に退會希望探否の件

(イ) 新加盟申込ありたる左記團體の加盟を承認す。

團體名稱	所在地	會員數	代表者
信州平穩溫泉	長野縣 下高井郡平穩村	七四	兒玉峯三郎
函館スキー協會	函館市若松町九六	五〇	二宮 祐道
上田スキー俱樂部	上田市 上田溫泉電軌内	五〇	柳澤健太郎
昭和スキー俱樂部	名古屋市 東道七間町一ノ一	一六八	衣川 清一
朝鮮スキー俱樂部	京城府 黃金町二ノ一六九	五五	吉田 眞弦
上古志	新潟縣上古志郡上組村	八〇	櫻井 眞吾
札幌スキー聯盟	札幌市札幌市役所内	五〇	橋本 正治
元山スキー俱樂部	朝鮮元山府陽地洞二	七七	中村 丘三
落合スキー俱樂部			

(ロ) 退 會

陸軍戸山學校スキー部、東北帝國大學山岳部

二、常務委員改選並に増員の件

黒崎三市、村山敏郎、廣田戸七郎、小川勝次の四氏重任

麻生武治氏新任。

三、昭和五年度決算及昭和六年度豫算の件

四、本聯盟の組織を財團法人に變更するの件

本聯盟を財團法人に變更するの件は滿場異議なく承認され「財團法人全日本スキー聯盟寄附行爲」は本部に一任す。

五、カレンダー編輯の件

「スキー及山のカレンダー」編輯の件は麻生氏に一任す

六、代表委員會に關する件

例年の代表委員會は午後一時前後に開始され午後十一時過ぎに於て終了される様な劇務振りであつたので昭和六年からは午前九時半頃より開始されると云ふことは結構なことである。

七、評議員に關する件

平塚直己(青森縣スキー聯盟) 岡本保三(樺太中央スキー俱樂部) 阿部正量(高田スキー團) 山口龍輔(秋田縣スキー聯盟) の四氏を本聯盟の評議員に推薦。

八、用語統一に關する件

豫て本部に於て立案のところ本年より麻生氏に一任さる

九、年鑑に關する件

年鑑に選手權大會出場者全部の詳細な記録を次號年鑑より實行することゝなつた。

一〇、審査員に關する件

第九回全日本選手權大會の飛型員候補者は次の五氏と決定す、吉岡龍太郎、廣田戸七郎、中川新、麻生武治、土

肥榮四郎。

一一、オリムピック選手に關する件

(イ) 次回オリムピック選手詮衡委員として本部より次の十二氏選任せらる。

稻田昌植、黒崎三市、村上敏郎、小川勝次、廣田戸七郎、麻生武治(以上本部) 鶴見宜治(信越) 吉岡龍太郎(青森) 中川新(東京) 大野精七(北海道) 横山賢市(樺太) 目黒乙次郎(樺太)

以上の委員の顔振れを見て意外に感ぜられたことは毎回日本スキー聯盟の代表として國際スキー聯盟會議に参加されてゐた木原均博士を初めとして、オリムピック、スキー競技や、北歐の大競技ホルメンコルン大會に参加した人々の大多數の氏名が見當らないことである。

サンモリツツに於て開催された、冬季オリムピック競技大會に、本邦スキー界は多大の犠牲を拂つて廣田戸七郎、伴素彦、永田實、竹節作太、矢澤武雄、高橋昂の六名を送り之に當時滯歐中の麻生武治氏を加へて母國の名譽のために戦ふたのである、されど當時の日本

スキー界は獨學であり、暗中模索のかたちで戦ひは悲惨な敗北に歸したけれど、アルプの南側チロル州から北歐ホルメンコルンまでに至る多くのスキー競技會は計り知れない教訓を吾等にあたへたのである。

この悲惨な敗北を唯の敗北で終るべき吾等ではない、敗北はやがての勝利への導きであらねばならぬ、この貴き經驗を採用してこそ初めてよりよき日本のスキーが生れるのではあるまいか、北歐に接觸の少ない日本に於て眞に競技スキーを語り最もよく外國の事情を知る人は木原博士を初めとする上記の諸君を置いて他にないことは明なことである。この人々こそスキー界に於ける基石でもあり又捨石でなければならぬと世間も認め自らも信ずるのである。其の貴き體驗者を振り捨て、新たなる基石を再び異國に向つて捨てんとすると、スキー界にとつて眞にゆゝしき大事といふべし、この秋にあたり吾人は更めて上記の諸君の追加を望んで止まないものである。

又次に注意しなければならぬことは今年度の選手權大會の會場が遠く樺太の地に於て舉行さるる關係から

して、この委員の中には選手の活躍に接し得ないことを豫め知りながらも任命されたと云ふことは不誠意といはねばならぬ、私は或る委員から「會場が豊原では麻生氏の外は東京の本部から一名も出席が出来ない」と聞き、更に會長の出席もどうやらあやしいと知つたときに非常なる不安を感じざるを得なかつた。

それは大正十四年の豊原大會に本州から出場した選手のみが知る多くのことどもである。

(ロ) オリムピック選手合宿及詮衡法の件

前記詮衡委員に一任せり。

一二、三ヶ年以上同一競技に於て選手權を保持せる者に對し特別賞を授與の件(否決)

三年續けて日本スキー界のランキングに第一位を占むる其の名譽は何物にも優る、ましてや其の中には朝香宮殿下の賜杯さへあるではないか、恐懼すべきことなり。

特別賞として選手に限定することなく日本的に功績のあつた人に、例へばノルウェーの如き方法なれば大いに望むところなり。

一三、選手權大會に關する希望

(イ) コースの正確、コース標示の完全、休養所の適地設置は勉めて努力することゝなつた。

(ロ) 全日本大會と神宮競技との例年の如き重複を避けて合同する様に關係者相互間に於て協議することゝなつた。

(ハ) 大會を三日とする件は否決さる

一四、選手權大會の豫選に關する件

豫選地は大泊、札幌、北海道内に新設一ヶ所、大鰯、沼尻、高田、飯山、立野原、菅平（新設）の九ヶ所と決定す。

下降競技を加へること（北大スキー部提案）

一五、本年度から公開競技として新たに下降競走が加へられることゝなつたことは甚だ結構のことであるが此の競技の内容に就いて深く考究することなく、單に、大長距離競技出發後の會場附近會衆の見物本位を以て決せられたことは昔日に逆行した感が深い。

一六、選手權大會の會場に關する件

1. 大會地を二ヶ處（内地及北海道）と定めること

明大スキー部提案

2. 本年度の大會は選手の出場し易き地にせられたし

青森スキー聯盟提案

代表者は札幌を主張す。

3. 樺太に於て開催されたし

早大スキー部

稲門スキークラブ

法政大學スキー部

樺太中央スキークラブ

大泊スキークラブ

4. 本年度大會は札幌に於て開催されたきこと

札幌スキー聯盟提案

北大スキー部

札幌スキー俱樂部

小樽スキー俱樂部提案

6. 信越地方に於て開催されたし

名古屋スキー聯盟提案

第四回代表委員會の申合せによれば今年は當然樺太が開催地であるべきを承知でありながら札幌説の生れた理由は何かと云ふに、今年日本の代表選手を決するオリムピック行きの選手豫選を兼ねた重大な年であるからして選手及び役員の出場し易い札幌の地に於て特に前例をま

けて、今年は札幌でして貰ひ來年は豊原にしては如何と云ふ案が持出されたのであるけれども、スキースポーツの政治化までも計られんとして樺太に決せられたと云ふことは大局の上からして心外に耐えない、而して前記第四回の申合せは今回にて打止め次年度よりは津輕海峡を中心として交互に開催されることとなつた。

樺太と決つた後に於て、豊原と大泊間に、會場の奪ひ合が會議席上に於てすでにさらけ出されて、遂に投票により豊原と決定したのであるが公平に見て豊原の地勢はとてうてい、大泊とは比較にはならない不適當なものである丘陵の豊かな大泊で絶えまなきトド松の大森林中を思ひ切つた滑走を續行し得る大競技を見せて貰はれなくなつたことを日本スキー選手諸君のために甚だ残念に思ふのである。今回の様な地形の優劣の明白な會場を決するに専門の技術者の會議も開かずに、採決によつてなされたと云ふことは、競技スキー界のため悲むべきことではあるまいか。私は今後かゝることのために權威ある専門會議の新設を望む。

一七、規約、規定改正の件

左の八氏を委員として審議す。

鶴見宣信、吉岡龍太郎、村上敏郎、麻生武治、中川新、

高橋昂、中村新一郎、矢澤武雄

(イ) 規約第十四條第二項以下を削る

(ロ) 大會規定第三條の二項「前年度大會に出場し第一位

第六位を」「第一位乃至第十位と」改正す。

同第十八條第一位乃至第六位を第一位乃至第十位と改む。

(ハ) 年齢により次の級を作る

滿三十才以上

壯年組

同三十才以下十八才以上

青年組

同十八才以下

少年組

五〇基米には少年組の参加を許さず

一八、第九回全日本スキー選手權大會

開催場所 樺太豊原郊外

日 時 昭和六年二月七日(土)

午前九時 五〇基米 午後一時 一八基米

(複合を含む) 二月八日(日)

午前九時 複合ジャムプ、ジャムプ

午後一時 三二基米リレー

雑 録

◆舊し Hütten-Buchから

Hütten Buch III.

Teine Paradies-Hütte

gebant in 1926

Hokkaido Universtiat Ski-Verein

扉をめくると裏に何時の頃書かれたのか。

先づ注意。海を最も恐るゝ者は漁師也、されば山を恐るる者は登山者でなければならぬ。山の天候は百パーセント迄は當にならぬと云ふ、用意周到に全てを餘分に整へて來なければならぬ。先づ山を恐るる事を望んでやまない。

第一頁には

起工 大正十五年七月十一日

竣工 大正十五年十一月二日

建設委員

委員長 大野精七

準備委員 平塚直秀、岡村源太郎、阿部謹吾、佐

々木政吉、田口鎮雄、岩森秀夫、田中次郎、徳永熊

雄、高杉正樹、小川玄一

建設委員 小川玄一、佐々木政吉、土井清、田口

鎮雄、徳永熊雄

設計者 マツクス・ヒンデル

建設費 二千九百四十六圓九十四錢也

寄附金 千五百八十五圓九十九錢也

本部支出 千二百六十圓九十五錢也

スキー部通常費 百圓也

以上

次第にめくると

パラダイスヒュツテといふに來て見れば

日本のこやに雪がヒユツてる 伊藤誠哉

豫科一年を修了して歡喜しつゝ來る。

一九二八・三・一三

スキー一年目の強者達が試験から開放されて來る。はる

く、青森縣スキー聯盟の一行が來訪する。

はるばると、海を越えて来ました、

あくがれて、あくがれて、

山、雪、そして、とうとう——あゝ

感激の深い、山の家、家——家です。

そろ／＼選手達が登つて来る。そしてはな／＼しい春の合宿が始まる。氣持のしつくりした、よくとけた合宿がうかゞはれる。

私しや手稻山、谷間の娘、

ジャムブ恐がる子はもたぬ、

ヨサコイ、アバヨ、マタオイデ!

良い雪が降つて来た。明日は頑張らう。

石炭の煤烟で眞黒になつた札幌

飽くまで白い此の雪と

あゝヒユツテに恵まれた俺達

Welllander の生活は今日から初まるんだ。

一九二八・三・二一

ダウエル、ラングセラウフの人達の壯快なシーツールが展開する。

出發。午前七時廿分。粉雪五寸

銀粉を蹴つて手稻の崖下に到着。八時二十分。

尾根傳ひは猛烈な寒氣と粉雪とに。

一行到る處で煙を樂しむ。

手稻の臺地には九時二十分。雪質良好

一氣に奥手稻へ飛ぶ。

頂上の手前で晝飯を攝り、少時休憩。

奥手稻頂上十時半、

八三八頂上十時五十五分、

和宇尻と遙山の鞍部に零時二十分到着、

午後一時より和宇尻に向つて滑降を初む、

途中、炭焼小屋に立寄つて水を飲み、

石狩灣の勝景を賞す、

更に愉快な尾根傳ひを續ける。

下界に降れば、雪質急變。

二時四十五分、錢函驛着。

同五十四分、汽車で輕川に向ふ。

輕川で風呂。一汗あびる。

そばを喰ふ、

再びヒユツテへ。

歸屋午後六時。

足並の良く揃つたことと、雪の良かつたことに於て嘗て味はざるものがあつた。(宮下記)

一九二八・三・二八

毎日日本一流の人々のコーチで、生れて初めの猛練習でした。初めは何んだか氣がひけましたが、日數につれ面白人ばかりなのを感じました。次の合宿も必ず來たいものです。

合宿やジヤムプばかりで日が暮れる。

合宿終り頃の選手達の氣持の動きは。

吾々が外國の雜誌を見たりして憧がれてゐたタムスのスタイル、それを色々と各人が意見を述べて練習した、あのなつかしいバラダイスシャンツエにも今は別れなければならぬと思ふと、たまらなく愛着を感じます。

(神澤記から)

此の合宿に入れて頂けた事は一生の感激でありました。全く久し振りで素晴しく濃厚な學生氣分にひたる事が出來、これも私しにとつて一生の感激でありました。いよ／＼山を降る事になつた今、云ふ事の出來ぬ寂しさがあります。何んと云つても學校時代が一生の感激ですよ。では……

(秋野記)

憧れの合宿、楽しい合宿、山で頑張る新人

山 極 末 男 七日

宮 村 六 郎 二十二日

山 田 彦 三 三日

黒 田 敦 七日

合宿のまどゐの燈は消え果て、

二日共訪れる人だになく、谷川のせゝらぎの音のみ聞く

(望月記)

けれど四月中旬に至つてもまだ／＼ゾンメルシイのシユプールは消えませんが。雪解けて、イチゲ、エンレイ草の香る頃、訪問者も様々で實際に山、ヒユツテの愛好者から見はなされ、捨てられる、ヒユツテは可愛さうです。

八月二日心ある人が August 1928, Berg-Hell として氣の利いた扉を書いてゐる。裏の其日の行程は、

昭和三年八月二日

札幌驛(四時二十八分)―輕川(四時四十五分)―輕川光風館(五時十分)―五九五米ピーク(六時四十分)―八三七米

ピーク(七時五十)―頂上(八時四十五分―九時二十分)―

澤入口(十時五十分)―ヒユツテ(一時二十分)

天氣―快晴で奥手稻、迷澤山、藻岩山、烏帽子嶽、百松

澤山は勿論朝里、白井、余市の連峰。石狩川、増毛方面

も鮮かに望む事を得た。

(關記)

九月六日

今度、畏くも吾等が宮様の御盛儀に此の記念すべきヒユツテの模型を献上することは深い意味ある事と思ひます

其の模型製作者を案内して久し振りに此處を訪れました

此の丘も初夏、晩夏、初秋では大分感じの違ひが感ぜられます。冬や、まだよい雪のある春の初めは勿論吾々ス

ギーを楽しむものは忘れ難いものですが、夏や秋の山や丘も亦吾々の氣を、心を靜めて呉れます。常に吾々を慰

安し、心氣を更新させて呉れるのは、この手近の手稻の自然であります。時計の獨り動いて居るのも常に誰かゞ此の自然に憩ひに來た事を思はせて嬉しい。これから續々出来るであらう、大小の兄弟姉妹のヒユツテ等の健康な生聲を感じつゝ其の前途の健全を切に祈ります。

(伊藤記)

ヒユツテの秋は斷片的に此等の歌によつて表されてゐる。

黄昏れて林の中を二人かな

(猪山人)

落葉浮ぶ溪流に朝嗽つかひけり

(猪山人)

朝まだき窓より星の一つ見ゆ

(荒城)

谷下りて清水くむやら落葉やら

(荒城)

十一月二日北海道帝國大學農學部畜産科三年目牛馬會顔役何某二人して愉快な真が見られる。

午後二時半輕川驛を出發、約十二貫目を背負ひつゝ登行開始。途中競技を行ひて遂に四時ヒユツテに到着。荒野

原の化物寺の如くに荒れ果てたる憂するヒユツテに一掬の涙を落し、大いに發奮して内部を大掃除し、序に鼠を

一匹捕獲し、徒然なるまゝに醬油燒にして食べる。味又かく別なりし。喜びしまゝに食欲進み遂に四日分の食料

を平け終んぬ。明日を思ひ、いさゝか不安を感ず。されど明日は、畜産科模範學生村本、神澤、清水、エトセトラの連中來る筈なれば、途中山篋中に待伏せ食糧強奪の一舉に出でん事を期す。けに恐るべきは空腹又その豫感なり。

十一月に入つてそろ／＼降雪を見る。

心のくほど靜かな雪の朝の窓の眺め (奇壁)

十日朝七時起床、零下五度、寒さ甚だし。遙か、西南を拜し曠古の御盛典を祝す。

十三日、氣温攝度零度、室内華氏六十五度、晴、風稍強、積雪二寸、シー擔つて來る勇敢な人々ある。

十二月二十一日、豫科の連中、試験から開放されて、心のくまで滑りに多數來泊する。毎日人の絶間がない。いづれも元氣な男子達ばかりだ。或る者はこゝで越年する。

朝方降雪五寸餘、天氣快晴。小屋を出發したのが十時、澤の左より登つてブツシュに苦勞しつゝ二尺の積雪をラッセルしつゝ登る、頂上についたのが十二時四十五分。

歸途雪質が悪いので、團子坂を歩いて居つた様なものだ。大晦日に小屋で年越をしたのは總勢九人、賑やかだった。

昭和三年十二月卅一日。 (藻介記)

寒いといふされるので、眼を覺したのが七時。昭和四年だ。一九二九年だ。紀元二千五百八十九年だ。雑煮にどのグルツベも賑やかだ。アルコールを暖めてゐる中に瓶が割れて屠蘇は全く流れてしまふし、早々の失敗、香を嗅ぎながら雑煮で祝ふ。皆んなで大掃除をする。之で昭和三年度を山の中に置いて歸れば里には新年が待つてゐる。 (藻介記)

昭和四年度の來訪者としては、砂川三井スキー部、三名、札幌一銀スキー部二名、小樽三井物産スキー部、三名。ヘルベチアヒユツテを経て、朝里岳ヒユツテに一泊、朝里余市岳を踏破下山小樽着の豫定とある。

私感激皆さん感激違ひあります。私感激！ヒユツテ大鍋米二升たく。粥二鍋出來ることあります。(頭悪い人このわけ解りません。)晚御飯お粥食ふ。朝飯お粥食ふ。感激々々あります。

粥腹で無事に着かりよか朝里岳

二日初滑りの來訪者約三十名(但し署名者による数です)

愈々スキーシーズンで登山者は毎日あとを断たない。手稲山頂スキーの林立するのを見る。時々手稲の峯をそつて凄
い吹雪がある。此の手稲でも、ヒユツテを出て空しくヒユ
ツテに歸らなくてはならぬ日もある。風なき極寒に、樹氷
の咲くのを見る。山々が怒をおさめた時、手稲の崖にはサ
ラ／＼サラ／＼雪崩がある。

十六日、高松宮御來訪のためヒユツテ使用は禁ずとある
愈々二十日

如何なる理由か知るべくもないが、高松の宮御來訪後、
ヒユツテの鍵は北大本部に於て保管され、ヒユツテンブツ
フは一度下山してゐる。何時の頃か再び山に登つたか知ら
ないが、立派に製木しなほされて登つて來てある。前の續
きをめくると昭和五年二月一日から始まつてゐる。

ヒユツテンブツをめくる事はしばらくとゞめて、スキ
ー部の幹事の間で、ヒユツテのよりよき經營として、小屋
番を置いて小屋使用料を受ける事にきめられた。小屋を使
用する意味に於て、一寸晝食を攝るだけでもヒユツテの存
在を有難く考へて貰はるべきなのに、たゞ番人の個人的き
らひから、好んで使用料をこぼむ人々の多き事を残念に考

へる。各自から先んじて納入する場合そんなきらひはない
筈だ。過言かも知れないが、そのこぼむ人に、白銅貨の放
し嫌ひがあるのでないのだろうか。この頁をかりて心ある
人にうつたへたい。

一月三日、我々の仲間の遭難。彼には氣の毒な事である
が、彼等の行動は完全なる準備、餘祐のある計畫にあつた
事だらうか、その點僕達自身の事として再考の餘地がある
と思ふ。

彼の犠牲によつて與へられた警告、彼の父兄によつて寄
附された金子は、再びかゝる變事のない様に、錢函から奥
手稲。奥手稲、錢函からヘルヴェチア。奥手稲から手稲バ
ラダイスヒユツテのシートールに指導標の立てられる様にな
つた。此のために錢函、奥手稲、ユートピア、バラダイ
スのシートールの手輕に然も安全になつた事を思ふ。くだ
／＼しい事ですが、山の天候は絶対に百パーセントでない
事。地圖と磁石をよく讀んで戴く事を望んで止まない。
時にはヒユツテの將來を思つて書かれた頁もある。

人々が山の奥へ次第に奥へと入つて行くのと同じに、此
のヒユツテもスキーの普遍化につれてどうなるべきか。

と疑問を投げて居る。

風教上、小屋の風雪に對する上から、又雪質の悪化の點を考へて斬るべき薪の場所を今から注意して欲しい。

(藻介)

ほんとうに、心なき人々のために、ヒユツテは勿論、ヒユツテ附近の損傷はひどいものがある。ヒユツテンブツの或真には心ない樂書がつゞけられてゐる。僕達は初めて山岳の崇高美浩然の氣に接する時、何等かの形で何か足跡を残して歸りたい物である。然しそれらの物を冷靜に考へた時、人の眼に粗惡な感情を起させない物である事が必要だ。決して技巧を希望するのではない。所謂樂書でない事を希望するのである。又僕達の手になる繪は僕達の畫才のない以上、一つの藝術を型造るものではない。極く稀である事留意しなくてはならない。ヒユツテンブツ其物について云つた事だが、立木は勿論、ヒユツテにその様な行動に出られる事は言語同斷と云はざるを得ない。

三月五日、我々の仲間の悲しい行動が傳へられた。定山溪方面に、ヘルヴェチア方面に搜索をつゞけましたが、十日手稻に集中されるに至つて、手稻の小屋は彼の友人によ

つて思出にふけられた事であらう。十三日一旦中止の止むなきに至つたのであつた。彼の屍は、月あけて四月十五日熊狩の人によつて發見された。彼の手記を通じて、彼の天地、彼の心の動きを知り、我々は今尙、彼の天地にあつて生存してゐる彼を感じる。嗚呼！彼の靈は永遠の手稻の峰に抱かれて守られて睡つてゐる事であらう。

三月十六、七日、安積兄等山の人々によつて再び一時搜索は續けられた。

三月二十四日、スキー部合宿のために選手達が登つて來る。二十八日頃には二十五六人揃つたらしい。

必死の意氣での合宿も、天候に惱まされてなか／＼うまくゆかぬ、……昨日も強風を衝いて猛練した。多量に水を含んだ惡靈にもかゝはらず、飛ぶ、飛ぶ、二十五米……サツツは、フライトは……と頭に描く事が出來得た今……残は、唯……血と汗との練習だけなのに、今日……今夜の雨……は雪になりガラ／＼した上に、一寸二寸ばかり積つてゐる。……風の野郎奴……空しく……天を眺めながら……今日も亦消化器か？

四月一日、或る目的のために来た、久振スキーをはいて見た、これで此のシーズンの履きおさめ。(健夫記)

暖い夜だった……晴れた……静かな夜だった……

熱いコーヒーに……ほんのりと顔を赤らめた若人達……

ま近かに別れの日を前にすつかり躍り狂った……

會津……オケサ……はてはチャールストン、

思出の踊りの夜……！今宵はリーダーを持たぬ悲しさ……

だが、愉快だったよ……

(四・六)

明日山を下りねばならぬ。来るべきシーズンに對する練習の第一線として行つた此合宿で、各自が輝かしい來シーズンに約束する光明を見出した事を喜びます。明年は雪辱の時である。友よ！一致協力しやうぢやないか。

(四・七、奥井記)

私は此春の合宿が初めての合宿だ。先輩の云ふ通り感激の合宿であつた。スキー部の人々は皆んな顔見知りになつた。皆んな愉快な人。話題に富んだ人、ほんとに懐し

い人許である。こんな基礎のある部に入部した事を幸福に思ひます。

選手諸君の感激は盡きない。豫科入學試験發表を恐れて山に登つた人々もある。幸にバスされた事を今新に喜ぶ。合宿が解散されて残る三人。

七日、北大の人達は皆下山、俺達三人となつた。天氣曇天一つも滑らず、二階に坐りこんで「太郎」ばかり、夕飯後も百回「太郎」をやつた、三人で非常に淋しかつたので、二三時頃まで歌ひあかす。

八日、天氣晴期、又錢函の海が見える様になつた。今日はこのヒユツテに吾々もおさらばだ。

三人は頂上を極めてもとをとつて歸つた。ある。四月十一日記す。俺は下界に降りたが未だなつかしいパラダイスシャントエを思へば、たまらず再び来る。此の四日充分に元を取るつもりだ。不幸、第三日目に雨のため下る。夜の淋しさは、唯、去りしシーズンを思へば何んでもなく却つて興奮劑となつた。總ての人々は春に酔つて居るのに、此のバラダイスは未だ春らしい気分はなく、唯だ練習あるのみだ。

(六郎記)

バラダイスシャンツエが篋の中に消えても、まだ残雪を追つて来る人が多々ある。五月四日、ゾンメルシーの記録を最後にスキ一のシユプールはブツフから消えてゐる。

此處まで讀んで来た。然し僕は讀み疲れた。讀むに心すゝまぬ頁が多い。終りの方になると至る所、ヒユツテのため、ブツフのために一掬の涙が走書ににじんでゐる。

昨日は宿泊者約二十人

料金箱は空

工費約三千圓のこのヒユツテ

大半は無斷侵入者

窓を破つて盗人と同じだ

これが山を愛する人だとは

一滴の石油でも奉仕が含まれてゐる

諸君が眞に山を好きで来るなら

誰も見ない處でこそすべき事を成し

眞に愉快な氣持で山の一夜を過してくれい。

(六・二一、S・K記)

この様な事は隨所に表れてゐる。再び訪れ来てヒユツテンブツフをひもとく人は必ず心する何物かゞあつて欲しい。

ヒユツテンブツフ第三號の汚點は永遠に消えないからと云つて再び前者の轍を踏む必要はない。

諸紙が報じた如く本年十月十七日神嘗祭を以て手稻バラダイスヒユツテ使用規定發表と共に實施される事になつたヒユツテ維持費として、一文の支出なく、たゞ薪代としてたゞそれを滿すに足るか足らぬ支出が計上されてゐるに過ぎない現状にあつて、心ある北大文武會及び北大の當局に一言したい。秩父、高松兩殿下の御使用を畏くする此のヒユツテの荒廢を默認するとは何んと云ふだらしない事だスキ一部の小さい會計の中に計上するよりか、文武會の獨立した會計として、計上さるべきだ。北大當局として文武會會計が許さなければ進んで此が維持費を計上すべきではなからうか。

それでこそ文部省、學校當局の提唱する所の思想善導及び體育獎勵のある一面がはたされるのではないだらうか。

前述の維持費の全々ない事からおして、薪斬、小屋番手當、石油、其他の備附品の支出は一にヒユツテ使用者、宿泊者の徳義心に俟つて、使用規定の實行される事を希望する。

十月七日、小屋の締切の個所に錠をしてペンキを入れてあつた所が侵されて、ペンキで小屋に樂書された事は慨嘆に絶えぬ次第である。少しでも、ヒユツテに對して拂はれつゝある努力を見られてお互ひに、心地よきヒユツテとされる事を此欄から再び希望する者である。

附、使用規定を掲げる。

因みに休憩所は輕川驛前角の田邊そば店。使用券、鍵の持參は確實に即ち第七、八條は嚴守される事。使用券は連續の場合これを一回と見做す。故に連續の場合發行日共一週間の滞在は許される譯である。然し宿泊回数だけの宿泊料を納入しなくてはならない。

ハラダイスヒユツテ使用規定

第一條 ハラダイスヒユツテハ北大文武會スキ一部ノ所有ニシテ

是レガ經營及ビ維持ヲナス。

第二條 ハラダイスヒユツテノ鍵ハ北大スキ一部輕川休憩所ニ置ク。

第三條 ハラダイスヒユツテノ使用券ヲ左ノ二種ニ分ツ。

種類	料	使用者	發賣所
特別券	金五錢	北大學生 生徒職員	北大本部會計課
普通券	金拾錢	一般使用者	北大スキ一部輕川休憩所

第四條 ハラダイスヒユツテヲ使用セントスル者ハ同ヒユツテ使

用券ヲ所定ノ場所ニ於テ求ムベシ。

第五條 使用券ハ一人一回限リニシテ發行日共一週間有効トス。

第六條 一旦納付シタル使用料ハ事由ノ如何ヲ問ハズ之レヲ返付

セズ。

第七條 使用券ヲ有セザル者ノヒユツテ使用ハ勿論入場ヲモ禁ズ

第八條 使用券ヲ有スル者ニアリテモ主腦者ハ北大スキ一部輕川

休憩所ニ於テ所定ノ手續ヲ經テ鍵ヲ受クベシ。

第九條 右主腦者ハ小屋使用ニ關シ其ノ責ニ任ズベキモノトス。

第十條 ヒユツテ使用者ハ備付帳簿ニ住所姓名其他所定ノ記入ヲ

ナスベシ。

第十一條 使用ヲ許可サレタル者ハ特ニ禁止サレタ部分及ビ備付

器具ノ使用ヲ禁ズ

第十二條 使用者ハ使用者心得ヲ嚴守スベシ。

第十三條 ヒユツテ使用ニ關シ二組以上ノ使用アリタルトキハ主

腦者ハ相互ニ協定ヲナスベシ。

第十四條 故意又ハ過失ニヨリヒユツテ及ビ備付品ヲ毀損シタル

者ハ辨償ヲナスベシ。

第十五條 宿泊セントスル者ハ北大スキ一部輕川休憩所ニ於テ

使用券ト共ニ宿泊券ヲ受クベシ。

第十六條 宿泊券ヲ左ノ二種ニ分ツ

種類	料	資格	發賣所
特別券	金拾錢	北大學生 生徒職員	北大スキ一部輕川休憩所
普通券	金拾五錢	一人一泊 一般使用者	北大スキ一部輕川休憩所

第十七條 使用済ノ上ハ直チニ鍵、使用券ヲ北大スキ部輕川休

憩所ニ返却シ使用狀況ヲ報告スルヲ要ス。

第十八條 使用券ヲ所持セザル者ニシテ左ノ條項ニ該當スル者ニ

限リ之レヲ許容ス。

輕川驛ヲ經由セズンテヒユツテニ到着ノ者。

行程ヲ變更セル者。

但シ備付帳簿ニ理由及ビ料金ヲ明記シ且ツ料金ヲ備付金庫ニ

納入スルヲ要ス。

第十九條 ヒユツテ使用ニ關シ不都合アリタリト認ムル時ハ爾後

其ノ同行者ノ加入スル一行ノヒユツテ使用ヲ禁ズ。

第二十條 パラダイスヒユツテ使用ニ關スル一切ノ事項ハ北大文

武會スキ部ニ於テ受理ス。

第廿一條 北大スキ部合宿ノ爲メ或ル期間ニ限リ一般使用ヲ禁

ズルコトアルベシ。

北海道帝國大學

文武會スキ部

(一九三〇・一一・二〇、K・K記)

◆寄贈並新着圖書雜誌

1. The British Ski Year Book 1930 No. 11

The Ski Club of Great Britain and The Alpine Ski Club.

2. Ski Notes and Queries No. 42.

The Ski Club of Great Britain

3. Der Schilkarf im Hochgebirge. Otto Roegner

4. Arabok 1930

Foreningen Til Ski-Iktrættens Fremme

5. 山と溪谷 2・4 山と溪谷社

6. Mitteilungen des Ski-Club Schwarzwald

7. 登高行(一九二五) 慶應義塾体育會山岳部

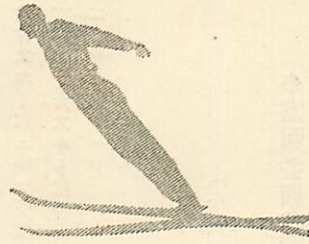
8. 登高行(一九二九) 同

餘 錄

十二月一日に發行の本誌が大變遅れて申譯ありません。

お詫び致します。

第四號は既に校正も終りましたから一兩日遅れて出るこゝ
になつて居ります。



ス キー ジ ャ ム ヤ ピ ム ガ ン

廣田戸七郎著

山とスキーの會刊行

本書はスキー競技に於て最も重要なスキージヤムプの一切を解説し、且つ國際スキー競技會に於けるジヤムプ競技の状況を詳説してあります。

四六判

二百四十四頁
別刷寫眞版 三十二葉
挿入圖版 四十餘圖

定價 金壹圓五拾錢

送料 拾貳錢

御希望の方は振替口座小樽八四九五番札幌市
北二條西十三丁目一番地「山と雪の會」宛に
御申込と同時に御振込下さい。

全日本スキー聯盟編輯

一九三〇—一九三一年度 スキー年鑑

(一冊金壹圓送料四錢
但注文は前金に限る)

内 容

法人組織の準備……………	稻田會長	第八回選手權大會……………	村上敏郎
諾威に使用して……………	木原 均	インタカレツヂを觀る……………	富永正信
ホルメンコール五〇料に出場して……………	麻生武治	神宮スキー雜感……………	中川 新
ワツクスを選び方と塗り方……………	麻生武治	樺太のスキー……………	土肥榮四郎
シユナイダー氏のスキーを語る……………	高橋次郎	朝鮮スキー界の現状……………	吉田眞弦
諾威旅日記……………	タケ・アソオ	ジャムピングヒルに就て……………	下平 廣

其他一九三〇年度に於て開催されたる各地各種の競技會記錄、加盟團體一覽表等に併せて寫真十數枚を加へ嘗て見ざる豊富なる内容を有せり。

一九三〇—一九三一年度 スキー規定集

(一冊金三〇錢送料二錢
但し注文は前金に限る)

聯盟規約、選手權大會規定、競技規定、國際競技規定等に併せてジャムブ競技採點表、複合競技採點表添附

發行所 全日本スキー聯盟

東京市本郷區駒込神明町三〇八番地小川勝次方

スキーシューズン來る！



スキー靴
スケート靴

各種取揃申候

大人用

金六圓八拾錢以上

小人用

金五圓八拾錢以上

【カタログ進呈】

札幌市南一條西二丁目

岩井信六

電話一二四番

スキーの王國

ノルウエーのエストビューに劣らぬ

太陽印
スキーロー

- ・メデアム・
- ・ミツクス・
- ・クリスタル・

札幌市北二條西十三丁目一番地

發賣元

雪山莊

冬山の運動具は！！

札幌市南一條

札幌の
コタニ運動具店

電話一五六八番
振替小樽七九六四番

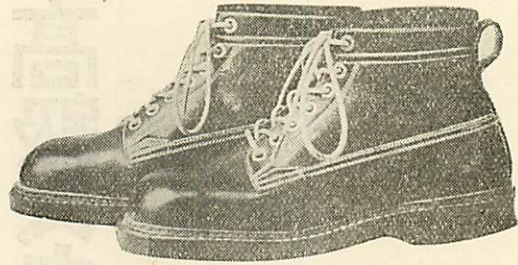
◆新定價表進呈◆

高級スキークラックス
オリエント

發 賣 元

飯 田 商 會

札幌市南一條東二丁目



スキー界に於ける

代表的優秀製品

●山岳用スキー靴

一四、五〇
一六、五〇
一八、五〇

●レース用スキー靴

八、八〇
一〇、五〇
一三、五〇

●實用スキー靴

五、〇〇ヨリ
一三、五〇マデ
各種豊富取揃

特製

スキー靴

皆様の靴店

札幌南二、西二



松

隈

屋

電話三一五三番
振替小樽八六九二番

◆「スキー」を研究せられる人、登山に興味を
持たれる方が一人でも多くお読み下さることを
御願ひいたします。

◆「山岳」と「スキー」に関する御寄稿と寫眞
の御惠送をお願ひします。

原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一
字下けること。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
六 部 金 一 圓 八 十 錢
十 二 部 金 參 圓 六 十 錢

*前金御申込か、現金でなければお送りいた
しません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

昭和六年一月八日印刷
昭和六年一月十日發行 (毎月一回一日發行)

編輯者 長 野 寛

印刷兼 發行者 長 野 寛

北海道札幌市北一條西二丁目
印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十三丁目
發行所 山と雪の會

振替口座水樽八四九五番

昭和六年一月八日 印刷納本
昭和六年一月十日 發行

(毎月一回一日發行)

山と雪

第參號

定價金三十錢



アールベルグ・スキー及び冬山の道具!

(純正ヒッコリー材・ロックバーチ材メーフル材)

ビッケル、EDELWEISS印

(鋼鐵手打製 24.27 $\frac{1}{2}$ ・30.33 $\frac{1}{2}$ cm 保證付)

ルックサック (スイス製布地、絶對防水)

スタィガイセン (鋼鐵手打製八本瓜其他)

燃料META及びアルミ炊事具各種

羽毛製シュラフザック及び冬期露營用具

Arlberg-Ski



Hannes Schneider

(商標登録)

三越・伊東屋・白木・野澤屋

合名會社

美満津商店

東京・本郷・赤門前

